富士吉田の文化財　（その19）

古屋敷遺跡

富士吉田市教育委員会

古屋敷遺跡

——発　掘　調　査　報　告　書——

富士吉田市教育委員会

序

山梨県の東南部にあたる富士吉田市は、富士の北麓に位置し、山並みにとり囲まれた自然環境の中に存在する高原都市です。

従来、当市は富士山の火山灰、熔岩等に深く埋没され、遺跡確認の困難な地域と考えられてきましたが、先に「富士吉田市の遺跡」として発表しました分布調査によれば30か所にのぼる遺跡が山麓地や田園地帯の中に存在することがわかりました。

昭和30年代以降、当市も急速に都市化が進行し、開発による埋蔵文化財の保護対策は緊急の課題となっております。

今回、大明見地区遺跡群の保護事業として、古屋敷Ｂ遺跡発掘調査を県の補助を得て実施し、同Ａ遺跡で検出された地下式土壙とあわせて、報告することができました。

本調査の団長をお願いした奥隆行氏をはじめ、法政大学考古学研究会の学生諸兄には８月の酷暑の中、献身的にご努力いただき、充分な成果をあげることが出来ましたことは喜びにたえません。

本書が、市民の埋蔵文化財に対する認識を一層深め、ふるさと研究と郷土を見直す資料として活用されることを願っております。

昭和58年３月

富士吉田市教育委員会

教育長　佐　藤　　務

例　言

1　本書は昭和56年度に、古屋敷遺跡発掘調査団と富士吉田市教育委員会との委託契約により実施した、古屋敷Ｂ遺跡の発掘調査報告及び古屋敷Ａ遺跡地下式土壙発掘調査報告書である。

2　本書の作成は、富士吉田市教育委員会が行った。古屋敷Ｂ遺跡執筆は、各遺構については調査者が作成した遺構原稿をもとに堀内が加除筆して取りまとめた。なお、その際文末に各記録者名を記した。その他の執筆については奥隆行、堀内真協議のもとに、Ⅱ章を奥、それ以外の執筆及び全体の編集は堀内が行った。

古屋敷Ａ遺跡については、堀内、渡辺儀訓協議のもとに渡辺が執筆した。

3　遺物の実測及び図版の作成は、堀内・渡辺・小野寺和貴・近野意誠・鈴木靖広・高橋和・滝島輝男・竹野直巳が主に行った。その他遺物整理及び報告書の作成にあたり、法政大学考古学研究会の協力を得た。

4　遺物及び実測図は、富士吉田市教育委員会が保管している。

5　本調査の調査組織は、別に示すとおりである。

6　発掘調査・報告書の作成にあたって、次の諸氏に御教示を賜った。（敬称略）

服部敬史（八王子市教育委員会）・斎藤孝正（名古屋大学文学部助手）・河野喜映（神奈川県文化財保護課）・末木健（山梨県文化課）・坂本美夫・新津健・米田明訓・中山誠二（山梨県立埋蔵文化財センター）・奈良泰史（都留市教育委員会）・天野保子（西桂町教育委員会）・小林安典（都留考古学会）・舟久保兵部右衛門（文化財審議委員）――順不同――

調査組織

古屋敷B遺跡発掘調査

古屋敷遺跡発掘調査団

調査団長	奥　隆行	都留考古学会代表
調査副団長	舟久保　寛	富士吉田市教育委員会教育委員
調査担当者	堀内　真	富士吉田市教育委員会
調査員	渡辺儀訓・渡辺　勉	
調査補助員	永倉実・村石真澄・森武彦・小野寺和貴・近野意誠・鈴木靖広・高橋敦彦・高橋和・滝島輝男・竹野直巳・早川一幸・藤田幸樹・八木沢健二・加藤聡・関根久雄（法政大学考古学研究会）	
事務局	市村　隆男	文化振興課長
	渡辺　一雄	文化財係長
	武藤　賢三	文化財係
	堀内　真	文化財係

古屋敷A遺跡発掘調査

調査主体者　富士吉田市教育委員会

調査担当者　堀内　真（富士吉田市教育委員会）

調査参加者　市村隆男・渡辺一雄・武藤賢三・加賀美健・小松進・宮下英司・天野孔文・
渡瀬英次・広瀬久幸・浅沼等・勝俣進（富士吉田市教育委員会）
渡辺儀訓（山梨県文化課調査員）
小幡哲明（都留文科大学考古学研究会）

―― 目　　次 ――

題字　文化財審議委員　野村静谷

第Ⅰ章　はじめに …… 1

第Ⅱ章　遺跡概観 …… 2

第Ⅲ章　古屋敷Ｂ遺跡発掘調査 …… 7

　第１節　１　地　区 …… 7
　第２節　２　地　区 …… 18
　第３節　３　地　区 …… 27

第Ⅳ章　ま　と　め …… 34

　第１節　平安時代 …… 34
　第２節　近　　世 …… 37

第Ⅴ章　古屋敷Ａ遺跡発掘調査 …… 38

　第１節　遺跡概観 …… 38
　第２節　調査経過 …… 40
　第３節　遺構と遺物 …… 40
　第４節　遺　　物 …… 42
　第５節　ま　と　め …… 45

おわりに

―― 挿図目次 ――

第1図　古屋敷遺跡と周辺遺跡分布図
第2図　地形区分図
第3図　遺構分布図
第4図　1地区遺構分布図
第5図　1地区土層図
第6図　第1号住居址
第7図　第1号住居址出土遺物
第8図　第1号住居址出土遺物
第9図　1地区グリッド内出土遺物
第10図　1地区出土遺物
第11図　溝状遺構
第12図　2地区遺構分布図
第13図　土層・遺構図
第14図　第2号住居址出土遺物
第15図　第2号住居址出土遺物
第16図　2地区グリッド内出土遺物
第17図　2・3地区グリッド内出土遺物
第18図　3地区遺構分布図
第19図　3地区土層図
第20図　1・2号土壙
第21図　3地区出土遺物
第22図　3地区出土遺物
第23図　土器編年図
第24図　古屋敷A遺跡遺構分布図
第25図　第1号地下式土壙
第26図　第2号地下式土壙
第27図　第2号地下式土壙出土遺物
第28図　第2号地下式土壙出土縄文土器
第29図　第2号地下式土壙出土石臼

―― 表　目　次 ――

第1表　第1号住居址出土土器表
第2表　1地区グリッド内出土土器表
第3表　第2号住居址出土土器表
第4表　2・3地区グリッド内出土土器表
第5表　竪穴住居址一覧表
第6表　鞴羽口一覧表
第7表　出土鉄滓一覧表

―― 図版目次 ――

図版1　遺跡遠景
図版2　遺跡近景
図版3　調査風景
図版4　第1号住居址
図版5　1地区中世溝状遺構
図版6　第1号住居址出土遺物
図版7　第2号住居址
図版8　2地区土壙
図版9　掘立柱状遺構
図版10　第2号住居址出土古銭（隆平永宝）
図版11　2地区出土遺物
図版12　3地区遺構
図版13　3地区出土遺物
図版14　2号地下式土壙奥壁
図版15　地下室床面
図版16　遺物出土状態
図版17　竪坑部

第Ⅰ章　はじめに

今回報告する4か所の調査地区は、古屋敷A遺跡が1か所、同B遺跡が3か所である。古屋敷地区は背戸山南縁部に所在し、大明見のうちで最も遺跡の密集するところであり、前述の遺跡のほか、山ノ神戸遺跡、長日向遺跡等が存在することが、昭和55年度に行われた遺跡分布調査の結果明らかとなった。しかし、周辺の開発とともにこれらの遺跡は、次第に消滅していくおそれがある。

昭和56年度において、文化財保護行政の一環として、該遺跡の現状と実態を把握することにより埋蔵文化財の保護・活用を図り、併せて現在その編さん事業が進行している『富士吉田市史』「原始・古代編」作成にむけての基礎資料とするため、市と古屋敷遺跡発掘調査団との間に委託契約を締結し、古屋敷B遺跡の発掘調査を実施した。

調査は発掘届（文書第611号）を昭和56年7月15日付けで文化庁に提出し、昭和56年8月3日から8月16日までの2週間の期間で現地調査を実施した。調査対象面積約150㎡のうち、3か所に発掘区を設定し、平安時代の竪穴住居址2軒、掘立柱状遺構1軒、土壙1基、中世の所産と考えられる溝状遺構4本とピット1基、江戸時代の遺構1か所を確認した。

古屋敷A遺跡は昭和56年11月18日より11月28日までの1週間にわたり発掘調査を行った。検出された遺構は地下式土壙（第2号地下式土壙）であり、埋土の除去作業の後、実測・写真撮影作業を行った。

調査に当たっては、都留考古学会代表奥隆行氏を団長とし、現場は市文化財担当職員が担当することとし、他に調査員2名と補助調査員による組織を編成して、委託契約締結のうえ調査を進めた。

第Ⅱ章　遺跡概観

山梨県は赤石山脈・関東山地・御坂山地にその周囲を囲まれた甲府盆地を中心とする国中地域と、県東部に位置し、御坂・道志両山地等からなる山がちな郡内地域に分かれる。関東山地から小金沢連嶺・御坂山地へと南に延びる山並みが、両地域を隔てる地理的な境界となっている。

郡内地域は、富士山とその山麓、御坂山地及び関東山地、道志山地から丹沢山地へと続く山岳高地であり、その山間を多摩川水系に属する丹波川・小菅川及び、相模川水系に属する主流の桂川をはじめ道志川・秋山川が関東平野に向かって流下している。流域には、狭溢な河岸段丘が発達し、山麓や河岸段丘上には数多くの遺跡が立地している。

桂川上流の富士吉田市域は、同市上暮地を基点として扇状に広がる山麓地であり、左岸の御坂山地及び、右岸の道志山地の山麓部や支谷の奥深くまで縄文時代以降平安期にわたる遺跡群が存在する。殊に道志山地は、古屋川・小佐野川・大沢川等による開析作用を受け、複雑な地形を呈している。

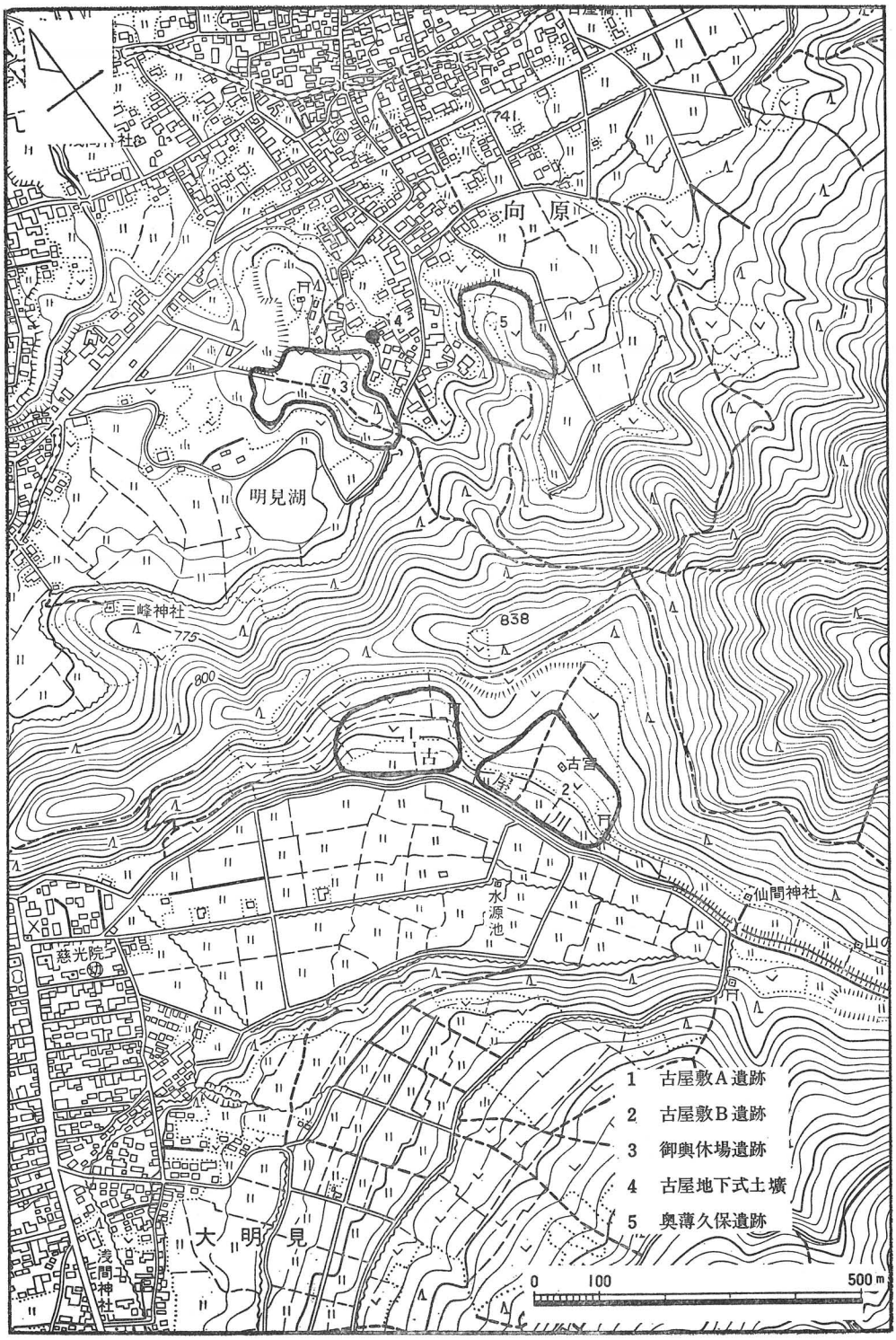
古屋敷Ｂ遺跡は、道志山地南東にそびえる杓子山から北西へ延びる尾根、通称「背戸山」南側縁部の緩斜面に立地し、中央部に埋没谷が存在する。鳥居地（鳥打）峠付近に源を発する古屋川は、杓子山と高座山の谷間を西流して、山の神社付近で開口し、大明見地区に向かって小扇状地を形成している。現在の古屋川の流路は人口的に付変えされ、扇状地より一段高い背戸山裾部の小段丘上を灌漑用水として耕地を潤しているが、かつては扇状地を複雑に変遷して流下していたものと推定される。

古屋敷Ｂ遺跡周辺の歴史的環境について、現在までのところ、先土器時代の遺跡は発見されていない。

縄文時代に入ると、数多くの遺跡が立地するようになり、早期から後期までの遺跡が知られている（第１図参照）。本遺跡の西方200ｍに位置する古屋敷Ａ遺跡（１）は、縄文時代早期の撚糸文期から晩期、弥生時代、奈良・平安期にわたる複合遺跡である。また、中世の地下式土壙も検出されている（後述古屋敷Ｂ遺跡参照）。背戸山から北へ派生する支尾根鞍部には、縄文前期諸磯ｂ期から藤内期にわたる遺物を出土する御輿休場遺跡（３）が立地し、北東へ延びる支尾根台上部に縄文早期の奥薄久保遺跡（５）が存在する。以上のように背戸山周辺には明見地区における代表的な遺跡が集中する。

縄文時代の初頭には、富士山新期火山活動による猿橋熔岩が市域西側を流下した。同熔岩流は、まず旧忍野湖を堰止め、桂川に沿って流下し、明見地区[(註1)]の道志山地裾合谷を塞ぐことにより、明見湖（第２図参照）をはじめとする湖沼が、大明見古屋敷、向原付近にも形成された。縄文時代の遺跡群は、これら沼沢地の汀線近くに存在したものと推定される。

弥生時代に入ってもひきつづき集落は営まれ、山ノ神戸遺跡からは条痕文系の土器が、古屋敷Ａ・Ｂ両遺跡からはそれぞれ中期初頭の土器が出土している。目を市外へ転じると、河口湖



第1図　古屋敷遺跡と周辺遺跡分布図

中の鵜の島・同町小立地区島原・同宝司ヶ塚遺跡等の条痕文系遺物を出土する遺跡が河口湖の旧汀線付近に出現することからも、郡内地域へは比較的早い時期に弥生文化が波及した事実をうかがわせており、殊に鵜の島遺跡の遠賀川系土器は注目される。河口湖と同様、市内明見においても弥生期の遺跡は、明見湖やその周辺(註2)の沼沢地を取囲むように存在し、稲作など農耕の可能性を示唆しているように考えられる。市域該期の遺跡群は、弥生時代以降五領期まで継続するが、以後しばらくは無人の地となっていたようである。

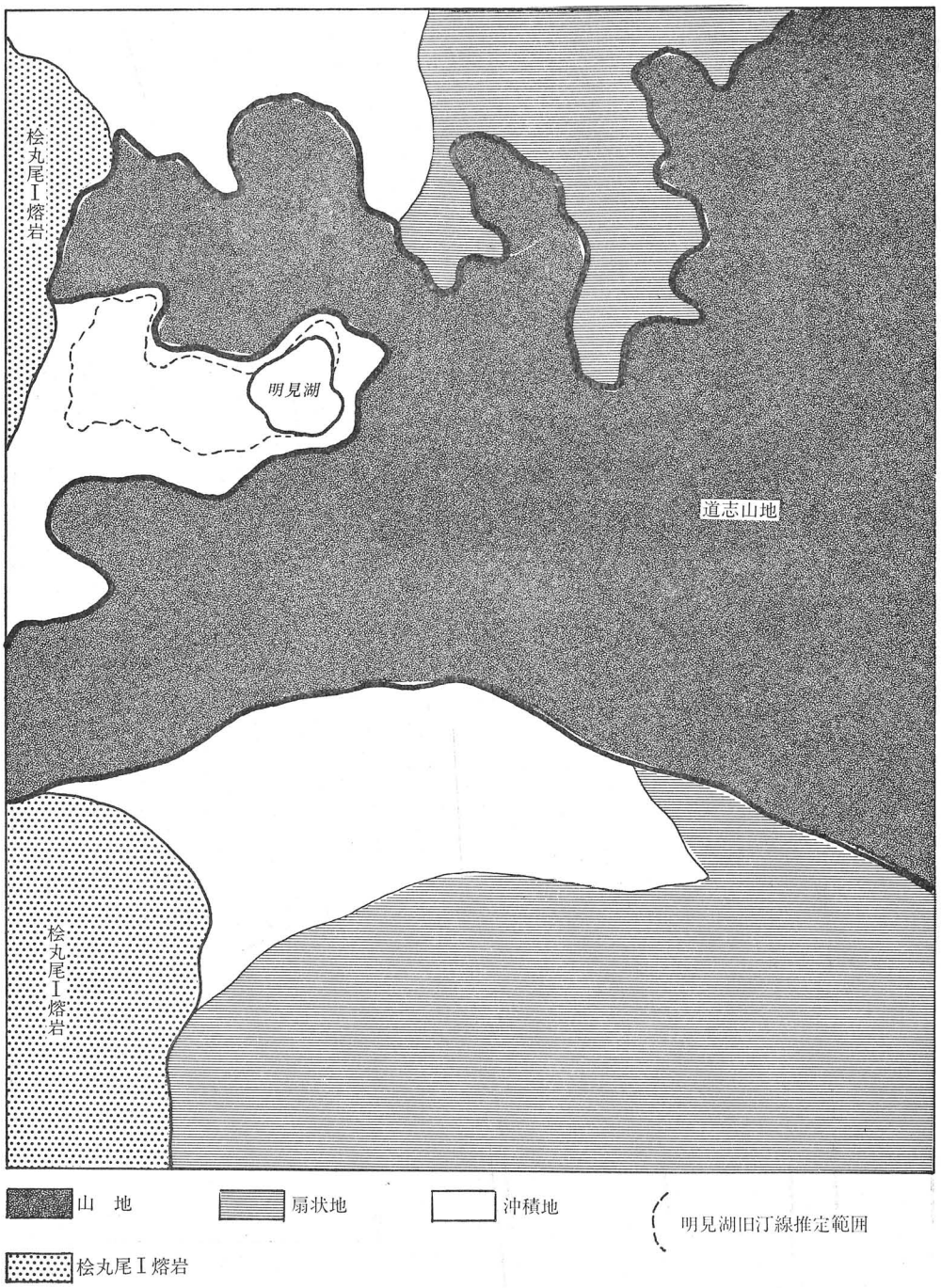
平安時代になると、桂川上流域の富士山麓の地にも開発が進展し、明見地区においてもこの時代の集落址として長日向・山ノ神戸・古屋敷Ａ・同Ｂ・山ノ寺等の遺跡が尾根端部の台地上や支谷の奥深くまで立地するようになる。一方、御坂山地南麓の新倉・上暮地方面においても平安期の遺跡が激増する傾向にある。それまで無人に等しい未開発の地であった本市域の人口は一気に増加したこと(註3)になろう。

江戸時代にはいり郡内地域は、谷村（都留市）勝山城を支配の根拠地とした秋元氏の支配するところとなり、宝永２年（1705）に幕府の直轄領となるまで、藩政が行われた。

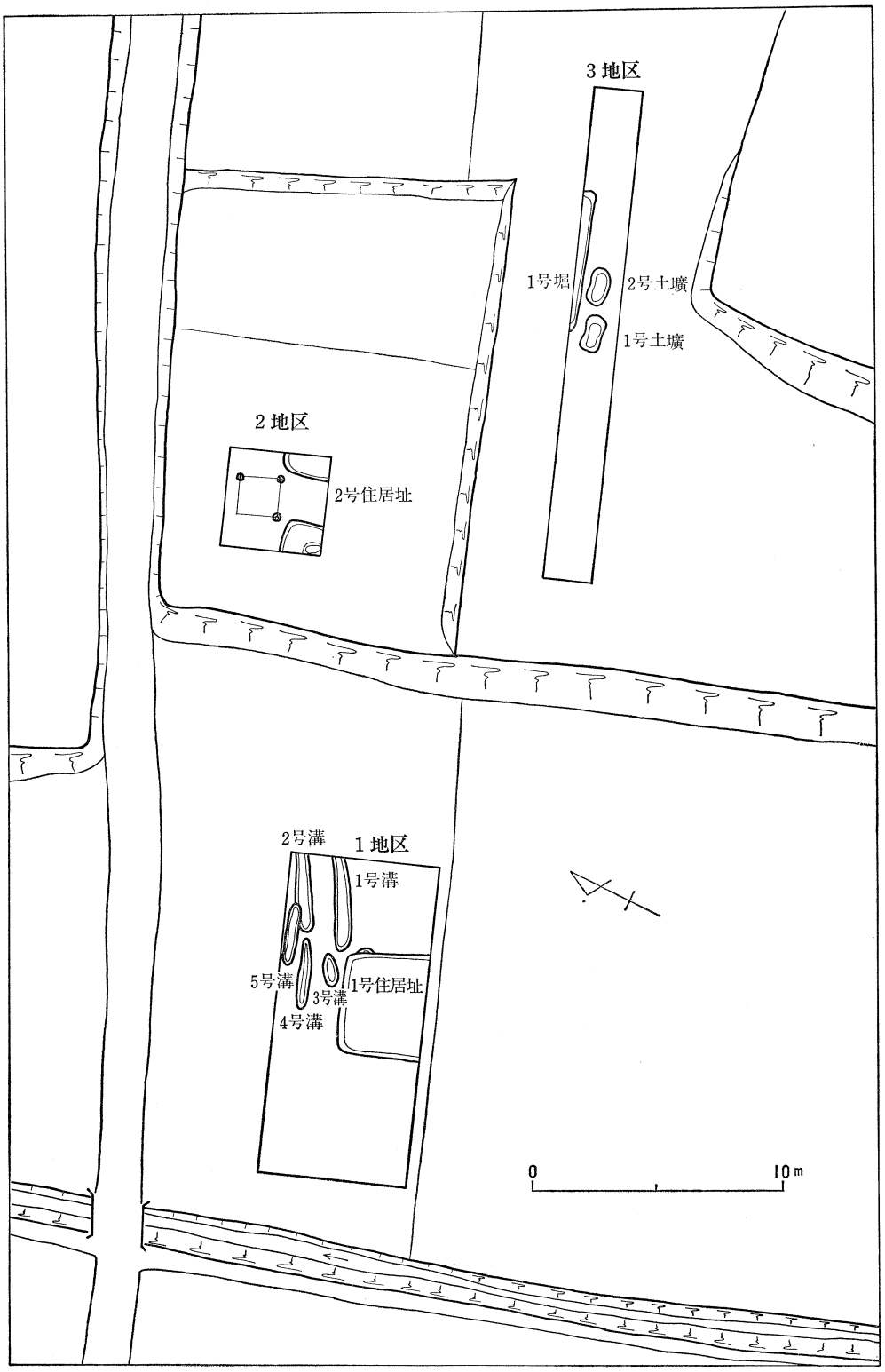
大明見村は、郡内領111ヶ村の１村として古屋敷一帯に村落を形成していたが、貞享３年（1686）一村あげて今日の大明見の地に移転したことが『甲斐国志』の記述に見え、村内を往時鎌倉街道と呼ばれた脇往還が鳥居地峠越えで忍野村に通じていた。

古屋敷Ｂ遺跡からは、平安時代を主体として近世に及ぶ遺構・遺物が検出され、近年次第に明らかになってきた周辺地域の考古学的成果とあわせ、埋蔵文化財と調和のとれた開発を図らなければならないだろう。

（註１）　町田洋　1977『火山灰は語る』
（註２）　山本寿々雄　1968『山梨県の考古学』
（註３）　富士吉田市教育委員会　1981『富士吉田市の遺跡』



第２図　地形区分図



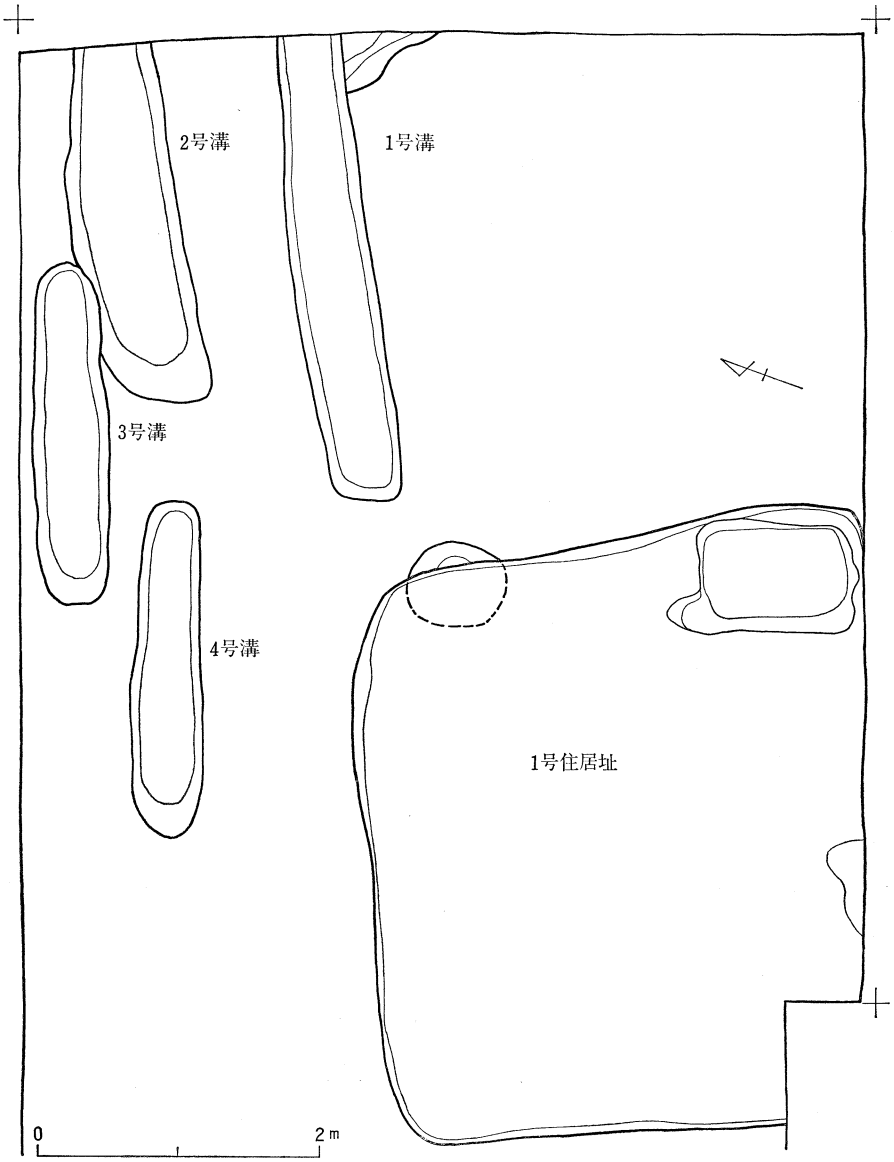
第3図　遺構分布図

第Ⅲ章　古屋敷Ｂ遺跡発掘調査

第１節　１　地　区

１　発掘経過

古屋敷Ｂ遺跡の発掘調査は、昭和56年８月３日から８月16日まで２週間にわたり実施した。遺跡推定範囲内に３か所の調査地区を設定し、遺跡南西側に南北13ｍ×東西６ｍのグリッドを設け、これを１地区とした。グリッド内を北を基点に７ｍ杭までを北区、それ以南を南区と



第４図　１地区遺構分布図

し、遺物の取り上げについては、南・北地区、層位により行った。

１地区の北東側の一段高い畑に１地区の主軸を12m延長し、４ｍ×４ｍのグリッドを設け、２地区とした。更に２地区東側の畑へ南北20ｍ×東西２ｍのトレンチを設定し、南北方向４ｍおきに杭を打ち、南を基点としてＡ～Ｅグリッドとした。

１地区で検出された遺構は、竪穴住居址１軒（第１号住居址）、溝状遺構（第１号溝～第４号溝）、及びピットである。

表土剝ぎ作業は８月４日から開始し、８月６日～８月７日までジョレンによる遺構検出を行った。その結果、１地区中央部東側に第１号住居址と南北方向に走る溝状遺構が検出され、遺物としては墨書土師器坏・羽釜口縁部破片をはじめとする土師器・須恵器片が出土した。８月10日から第１号住居址の覆土除去作業をはじめ、床面から全長20㎝の刀子完形品が４個体に割れて出土する。図面作成・写真撮影・溝状遺構４本の覆土除去を行い、８月15日に１地区の調査を終了することができた。８月16日にはブルドーザーによる埋戻し作業を行う。

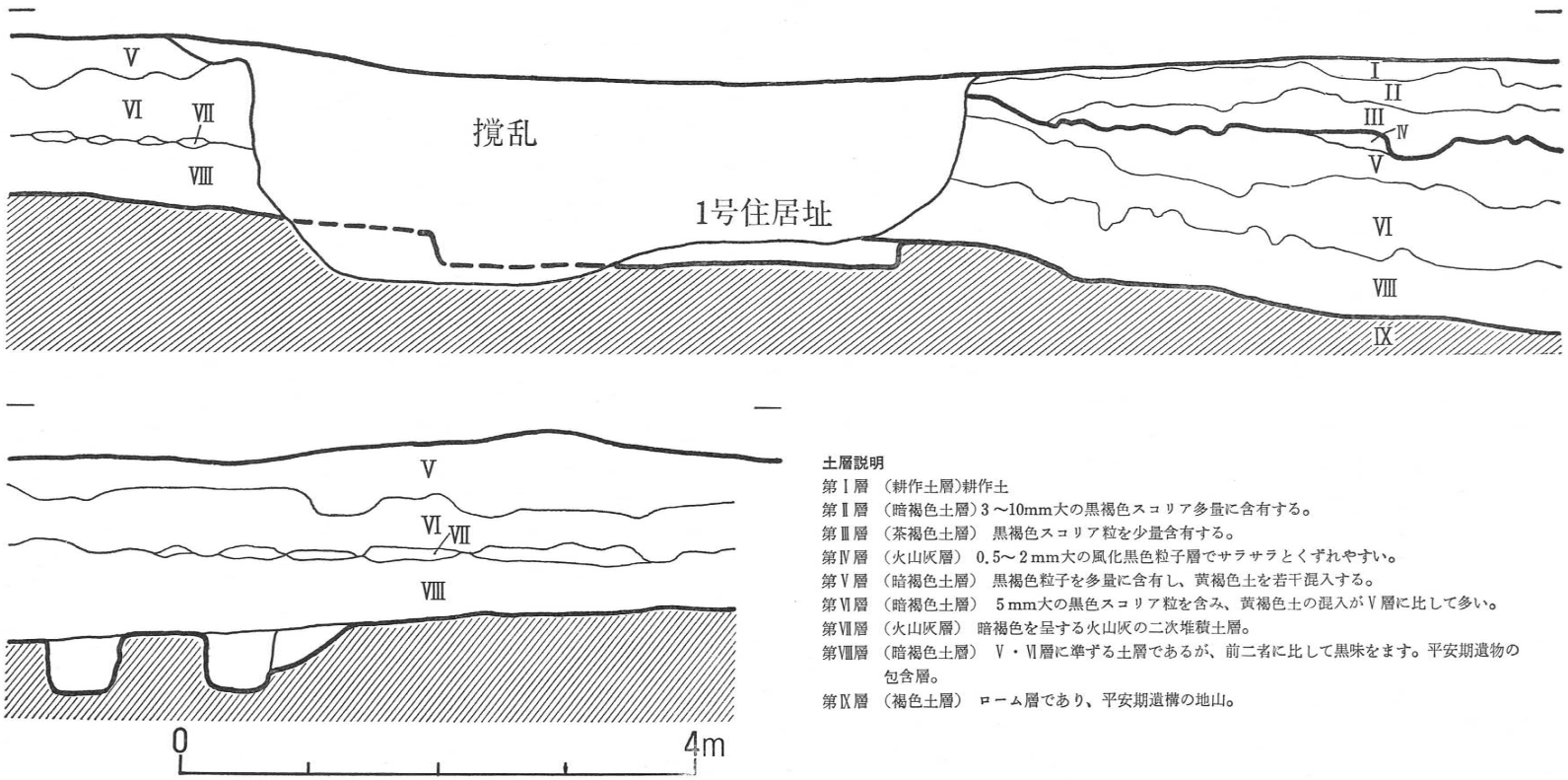
２　層　　序（第５図）

層位は畑地であるため、地表面から平均30～40㎝、場所によっては更に深く耕作のため、攪乱が著しかった。また、埋没谷に隣接しているために、平安期の遺構検出面までは深く、約1.６ｍを測る。

第１層は表土層で耕作によって攪乱された土層である。第Ⅱ層は暗褐色土層であり、径３～10mm 大の黒褐色スコリア粒子を多量に含有する粘性の乏しいザラザラな土層である。第Ⅲ層は茶褐色土層であり、黒褐色スコリア粒子を少量含有する。斜面に対して水平面を形成するように堆積しており、人為的に客土された水田のマサと考えられる層である。第Ⅳ層は火山灰層であり、径0.５～２mm 大の風化黒色粒子層でサラサラとくずれやすい。第Ⅴ層は暗褐色土層であり、黒褐色スコリア粒子を多量に含有し、黄褐色土を若干混入する。第Ⅵ層は暗褐色土層で、径５mm 大の黒褐色スコリア粒子を含み、黄褐色土の混入が第Ⅴ層に比して多い。第Ⅶ層は暗褐色を呈する火山灰の二次堆積層である。暗褐色土を基調とし、径２mm 大の風化黒色スコリア粒子を多量に、赤褐色スコリア粒子を若干含有する。緩傾斜面、凹地においてのみ確認される。第Ⅷ層は、基本的には第Ⅴ・Ⅵ層に準ずる暗褐色土層であるが、前二者に比して色調はやや黒味を増す。平安期遺物包含層である。第Ⅸ層は褐色土層であり、平安期遺構の地山である。

１地区における各層中の遺物出土状態は、第Ⅴ層から近世の遺物が出土したほか、第Ⅷ層からの出土が最も多く、第Ⅵ層からの出土はわずかである。第Ⅷ層出土遺物の内容は、平安期土師器・灰釉陶器が主体を占め、若干の縄文土器（後期）が包含される。

出土遺物は、住居址、溝状遺構に伴うもののほか、包含層（第Ⅷ層）出土の遺物も多く、鞴羽口・鉄滓はすべて包含層中よりの出土であった。平安時代住居址・溝状遺構の遺構確認面は第Ⅸ層の上面であり、覆土となっていたのは第Ⅷ層（暗褐色土）であった。　　（高橋和）



土層説明

第Ⅰ層　(耕作土層)耕作土
第Ⅱ層　(暗褐色土層)3～10mm大の黒褐色スコリア多量に含有する。
第Ⅲ層　(茶褐色土層)　黒褐色スコリア粒を少量含有する。
第Ⅳ層　(火山灰層)　0.5～2mm大の風化黒色粒子層でサラサラとくずれやすい。
第Ⅴ層　(暗褐色土層)　黒褐色粒子を多量に含有し、黄褐色土を若干混入する。
第Ⅵ層　(暗褐色土層)　5mm大の黒色スコリア粒を含み、黄褐色土の混入がⅤ層に比して多い。
第Ⅶ層　(火山灰層)　暗褐色を呈する火山灰の二次堆積土層。
第Ⅷ層　(暗褐色土層)　Ⅴ・Ⅵ層に準ずる土層であるが、前二者に比して黒味をます。平安期遺物の包含層。
第Ⅸ層　(褐色土層)　ローム層であり、平安期遺構の地山。

第5図　1地区土層図

3　遺構と遺物

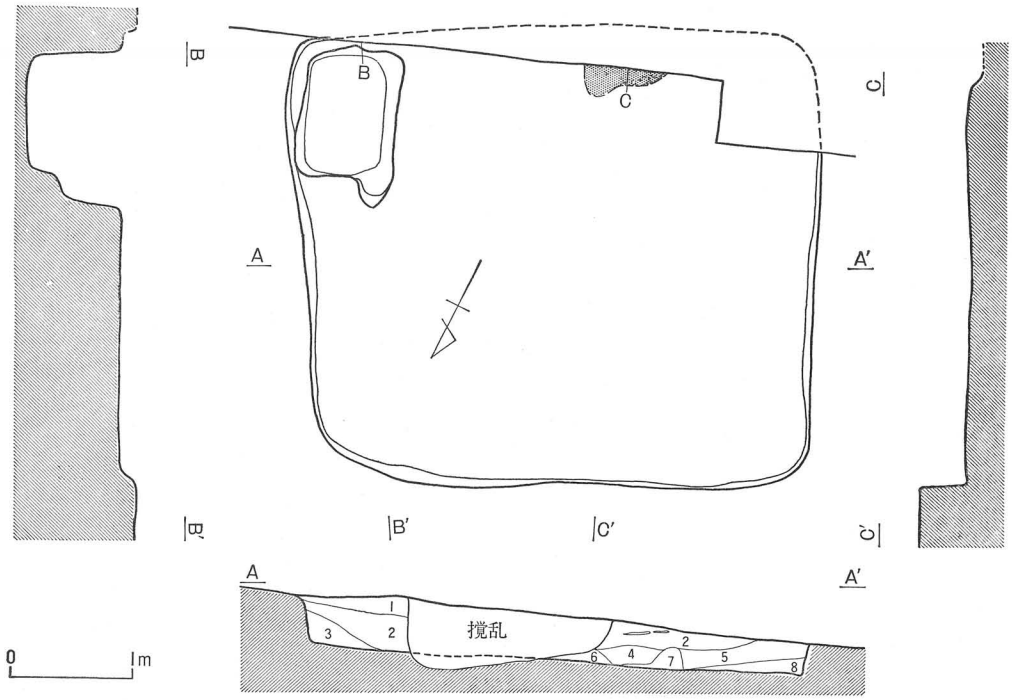
A　平安時代

第1号住居址（第6図）

本住居址は、1地区中央部に位置し、東壁側はグリッド外にかかるため完掘されていない。また、中央部に大きく攪乱を受けており、保存状態は必ずしも良好とは言えない。北壁コーナー部には中世のものと思われるピットが重複している。竈は東壁に構築されるが、調査区域外のため調査できなかった。

形態は長軸4.2m、短軸（主軸方向）3.7mの隅丸方形を呈する。

壁高は北側で高く38cmであるが、南側では低くなり、20cmあまりである。床面は中央部竈寄りの部分は攪乱のため確認されなかったが、西壁側は堅緻に踏固められ、ほぼ平坦であるが、北から南に向かってわずかに傾斜している。周溝は確認されず、北東コーナー部には長軸1m、短軸0.8m、深さ0.6mの長方形を呈する床下土壙が存在した。遺物は発見されていない。



土層説明

第1層　(暗褐色土層)多量の黒色スコリアを含み、粘性を持つ。
第2層　(暗褐色土層)若干の褐色土を含み、一部に火山灰層を含む。
第3層　(褐色土層)小量の暗褐色土を混入し、黒色スコリアを含む。
第4層　(暗褐色土層)多量の黒色スコリアを含み、色調は2層よりは暗い。
第5層　(暗褐色土層)多量の黒色スコリアを含み、粘性・締りがある。
第6層　(暗褐色土層)少量の黒色スコリアを含み、粘性はややあるが締りは弱い。
第7層　(暗褐色土層)多量の黒色スコリア、少量の赤褐色スコリアを含む。
第8層　(暗褐色土層)　少量の黒色スコリアと粘土ブロック、及び多量の火山灰を含む。

第6図　第1号住居址

覆土は8層に分層できたが、黒色スコリア粒子を含有する暗褐色土の単一層とみなされるが、第2層には部分的にではあるが、火山灰の層が薄く堆積していた。（鈴木）

出土遺物（第7・8図）

遺物の出土量は図示した以外には少なく、覆土中出土の縁釉陶器細片1点のほか、土師器、灰釉陶器片が若干出土した。土師器坏類は、ほとんどが口縁部破片であり、底部破片は糸切りはなし後無調整の遺物である。全体の器形は分からないが、甲斐型の伝統的技法でなされてきた側部下半の斜めヘラケズリは全く見られず、ヘラケズリ技法（甲斐型坏）の消滅期の坏であり、坂本他編年のⅩⅢ期に比定される遺物と考えられる。(註1)

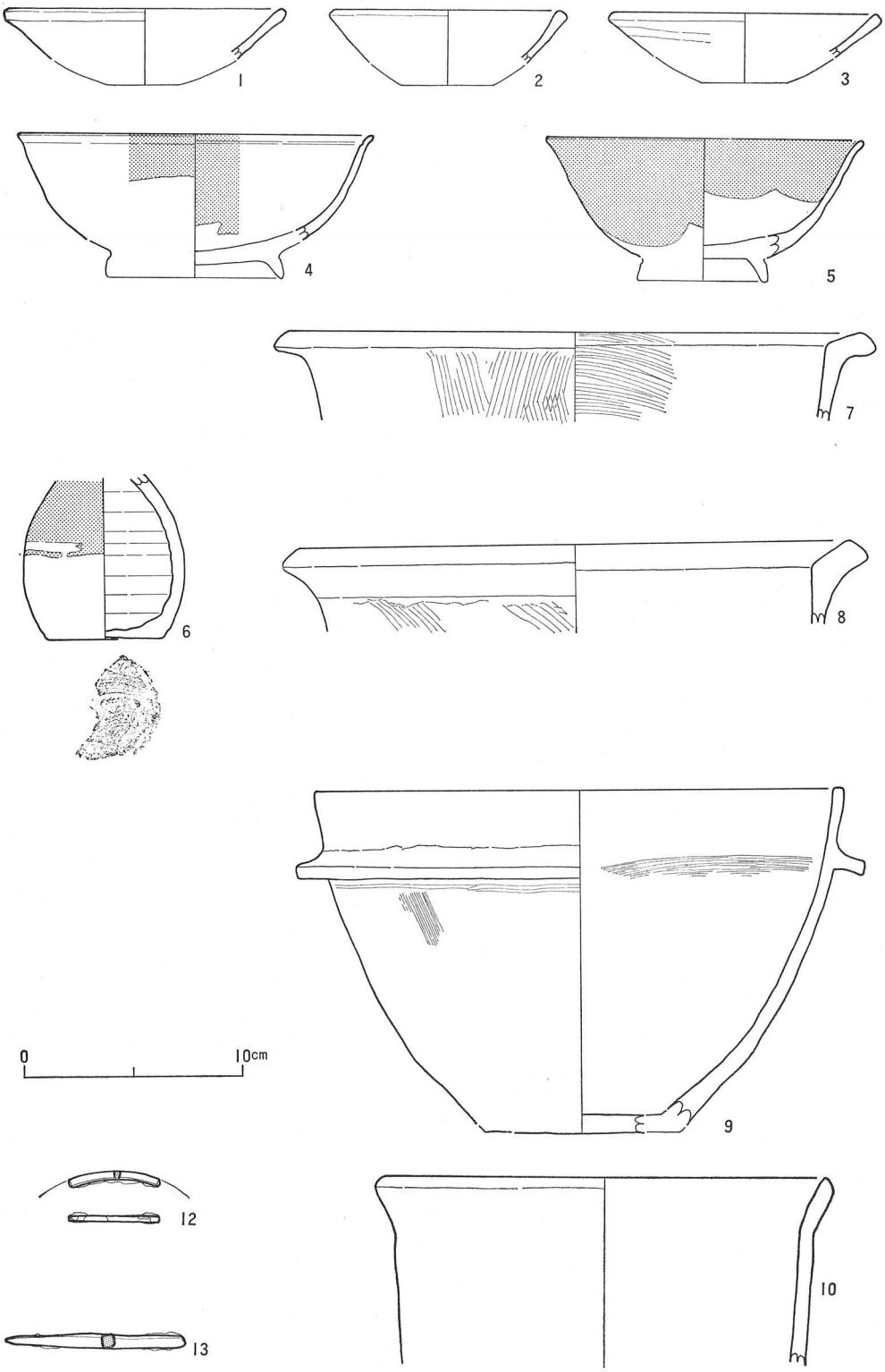
坏（1～3）は口縁部破片であり、口縁部から側部下半まで内・外面ともヨコナデ整形される。灰釉陶器椀（4・5）は、大ぶりでみこみの深いものであり、ともに高台部を欠く。（4）は口唇部直下に一条の沈線をめぐらす。いずれも漬掛けによる施釉であり、東濃系の大原2号窯式期にあたり、このうち（5）は虎渓山窯の製品と推定される。（6）は灰釉陶器小型瓶で頸部を欠く。胴部上半は施釉され、底部は糸切りはなし後無調整である。土師器甕（7・8）は甲斐型の製品であるが、（10）は、内・外面とも二次的整形が認められず、胎土も前者とは異なり、坏に近い胎土を有する製品である。土師器羽釜（9）も甲斐型の範疇ではとらえられない遺物である。須恵器甕（11）は胴下半部破片であり、外面はタタキ板によるタタキ目調整が施され、内面はナデ調整されているが、輪づみ痕が明瞭に残っている。

鉄　製　品（第8図）

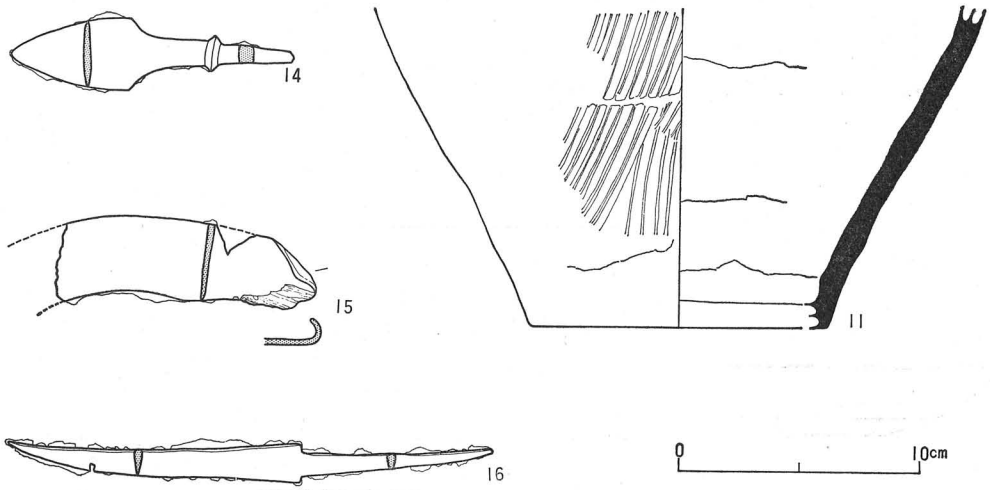
（12）は円孤状を呈する鉄製品であり、外面には板状の銀が張られる。。現長は4.2cm、断面は台形を呈する。直径は12cm前後。覆土中から出土した。（13）は棒状の鉄製品であり、錐状を呈する。全長8.2cm、断面は方形で、先端は尖っている。鉄鏃（14）は全長11.6cmを測り、茎部分に受け部（稜）を有する。鉄鎌（15）は、現有長10.7cmを残し先端部が欠損している。刃部幅3.2cmを測り、基部を折り曲げかえりとし、木質部が若干残存する。刀子（16）は完形品であるが5個体に分かれ床面から出土した。全長20cm、刃部12.1cm、茎7.9cm、刃部最大幅1.6cmを測る。刃部断面形態は三角形を呈する。

グリッド内出土遺物（第9・10図）

1地区グリッド内より出土した遺物のうち実測できた土器数は第9・10図のとおりである。（7）の須恵器、（6）の灰釉陶器をのぞき、他はすべて土師器である。（1・2）は坏破片であが、（1）は側部に稜を有し、内面に2条の横位ヘラミガキをもつ。（2）は内面にラセン状のヘラミガキを施す。坏（3～5）のうち（3）は暗文をもつ甲斐型の製品であるが、（4）は第1号住居址と同期の所産であろう。底部に糸切り痕を有する。（5）は墨書土器であり「凶夫」の文字が読みとれる。灰釉陶器（6）は、長頸壺頸部片であり、（7）は須恵器甕口縁部破片で、焼成は極めて良好である。土師器甕（8～13）の中で（11）のみ胎土を異にする製品であるが、他は甲斐型の整形技法によりつくられた製品である。（8～11）の底部はいずれも木葉痕を有する。（14）は羽釜の鍔破片である。



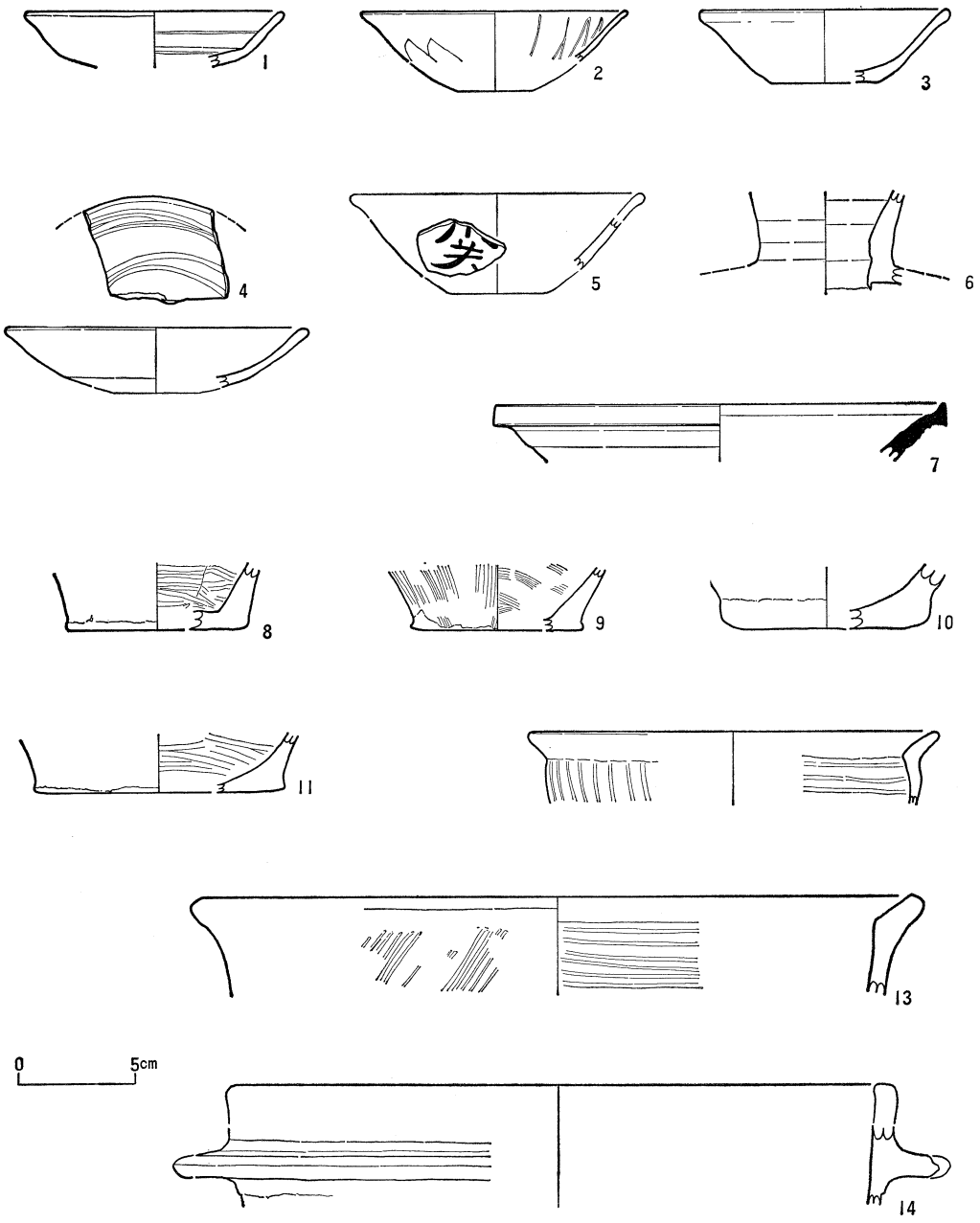
第７図　第１号住居址出土遺物



第８図　第１号住居址出土遺物

第１表　第１号住居址出土土器表

土器番号	種類	器形	法量 口径 底径 器高	器形の特徴	整形の特徴	胎土	備考
1	土師器	坏	12.9	底形の小さい小ぶりの器形をなす。体部はやや内湾して開き、口唇部で若干肥厚する。	内・外面とも横ナデ。	赤褐色粒子を含む。	
2	土師器	坏	10.8	口径と底径の小さい小ぶりの器形をなす。体部は内湾し、口縁部で肥厚する。	内・外面とも横ナデ。	砂粒をわずかに含む。	
3	土師器	坏	12.5	底径の小さい小ぶりの器形をなす。体部は直線的に開き、口縁部で肥厚する。	外面は棒状工具による横ナデ。内面は横ナデ。	砂粒・赤褐色粒子を若干含む。	
4	灰釉陶器	椀	16.3	口径は大きく、体部は内湾し、口縁部で外反する。	内・外面とも横ナデ。口縁部内側に一条の沈線を持つ。	大粒の石を含む。	灰色。焼成堅緻灰釉上に灰が付着
5	灰釉陶器	椀	14.5	器高が高く、体部は内湾し、口縁部で若干外反する。	口縁部・内面は横ナデ。	石英をわずかに含む。	虎渓山窯製品
6	灰釉陶器	小型水瓶	5.3	胴部と頸部は個々に造ってから接合させたもの。	胴部は横ナデ。底部は糸切り後外周を指頭によるナデ。	石英をわずかに含む。	
7	土師器	甕	27.4	直立する胴部から、口縁部は大きく外反し、水平に近く開く。	内・外面ともハケ状工具によるハケ目施文。	砂粒を多量に含有する。	甲斐型甕
8	土師器	甕	26.8	直立する胴部から、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面は隙間の広いハケ状工具により斜めにハケ目施文。	砂粒を多量に含む。	甲斐型甕
9	土師器	羽釜	24.3	胴部はやや内湾ぎみに立ちあがり、口縁部は直立に近い。口縁下約３cmに鍔がつく。	鍔下部は棒状工具により鍔接合部を調整し、以下はハケ状工具により弱いハケ目。鍔接合部内面は横位に弱いハケ目。	大粒石英・砂粒を含む。	
10	土師器	甕	21.1	円筒状の胴部から口縁部はわずかに外反する。	胴部外面は部分的に弱いヘラケズリ。	大粒の石英・砂粒を含む。	
11	須恵器	甕	12.3	底部と胴部２か所に接合痕を有する。	外面は叩き板によるタタキ目。		色調は青灰色で焼成堅緻



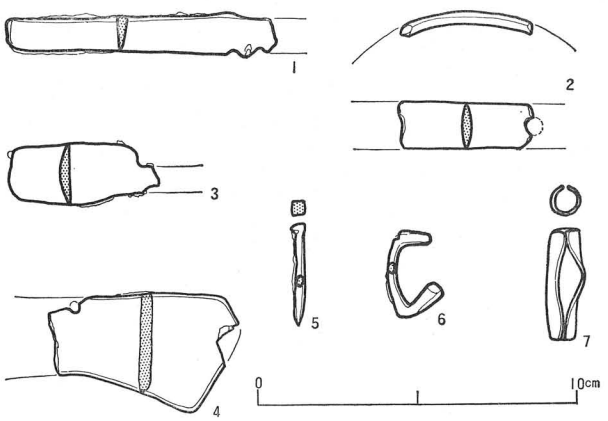
第９図　１地区グリッド内出土遺物

第２表　１地区グリッド内出土土器表

土器番号	種類	器形	法量 口径 底径 器高	器形の特徴	整形の特徴	胎土	備考
1	土師器	皿	11.1	側部下半に稜を持ち、やや内湾ぎみに立上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面底部及び側部に２条の横位ヘラミガキ。	大粒の赤褐色粒子を含む。	内面暗褐色、外面黒色
2	土師器	坏	11.4	側部は内湾ぎみに立上がり口縁部はわずかに外反する。器厚2㎜の薄手のつくり。	側部外面は斜めヘラケズリ。内面は花弁状の雑な暗文。	赤褐色粒子を含む。	
3	土師器	坏	10.7　4.6　3.1	側部は内湾ぎみに立上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面とも横ナデ。底部は糸切り後無調整。	赤褐色粒子をわずかに含む。	
4	土師器	皿	13.0	側部は内湾ぎみに立上がり、口縁部は玉縁を呈す。	内・外面とも横ナデ。内面側部は不規則な横位ヘラミガキ。	赤褐色粒子を含む。	
5	土師器	坏		側部は内湾ぎみに立上がる。	外面は斜めヘラケズリ。内面は調整ナデ。	赤褐色粒子を含む。	墨書土器「小夫」
6	灰釉陶器	長頸壺		胴部と頸部は個々に造ってから接合させたもの。	胴部外面は横ナデ。	石英をわずかに含む。	外面は暗黒色の光沢をもつ
7	須恵器	甕	19.2	口縁部の折返しが垂直に立つ。		石英・長石を含む。	
8	土師器	甕	7.5	底部から垂直に立上がる。	底部は木葉痕。内面横位ハケ目。	石英・砂粒を含む。	甲斐型甕
9	土師器	甕	7.4	底部から斜めに立上がる。	底部は木葉痕。内・外面ハケ目。	石英・砂粒を含む。	甲斐型甕
10	土師器	甕	9.0	底部から斜めに立上がる。	底部は木葉痕。	石英をわずかに含む。	
11	土師器	甕	10.7	底部から垂直に立上がる。	底部は木葉痕。内面横位ハケ目。	石英・砂粒を含む。	甲斐型甕
12	土師器	小型甕	17.1	口縁部は「く」の字状に開く。	外面は縦位、内面は横位のハケ目。	石英・砂粒を含む。	甲斐型甕
13	土師器	甕	31.3	口縁部は緩い「く」の字状をなして外反する。	口縁部外側に粘土をはりつけて補強する。外面は雑な縦位ハケ目。内面は横位ハケ目。	砂粒を含む。	甲斐型甕
14	土師器	羽釜		鍔部から口縁部へは直線的に立上がる。鍔部はほぼ水平。	鍔接合部内面は弱い横位のハケ目。	砂粒を含む。	甲斐型の製品

金属製品（第10図）

グリッド内から出土した金属製品のうち、図示した７点以外にも性格不明の鉄製品の破片は多い。（２）は青銅製品であり、他はすべて鉄製品である。刀子（１）は茎を欠損する。現有長は8.5㎝、最大幅1.3㎝、断面は



第10図　１地区出土遺物

三角形を呈する。（2）は青銅製の円弧状製品である。直径約9㎝、最大幅1.5㎝を測り、径6㎜の穴が穿たれている。（3～7）はいずれも鉄製品であり、釘（5）を除いて性格不明の製品である。

B 中世遺構

溝状遺構（第11図）

1地区の南北方向に設定したグリッド北側において、グリッドの主軸方向に概ね平行して、4本の溝が検出された。

第1号溝は、その全長は不明であるが、グリッド北限から3.3mで立ち上がる。上面幅は45㎝～58㎝をなして、南側へと幅をわずかに広げている。底部幅も、上面幅に比例して30㎝～42㎝と南に向かって広がっている。断面は両側面が緩く広いた箱型を呈し、深さ40㎝を測る。底部は均一でなく、凹凸がはげしい。内部の堆積土は5～6層に区分されるが、黒色スコリアを含有する黒褐色土の単一土層である。

第2号溝もグリッドの北限から南に延び2.6mで立上がり、第1号溝の西側約70㎝にほぼ平行して存在する。上面幅は65㎝～55㎝をなして西側縁部が広がり、かつ第3号溝に切られている。底部幅は35㎝～60㎝、断面は両側面がわずかに開く箱型であり、深さ43㎝を測る。堆積土は黒色スコリアを含有する黒褐色土である。土師器細片が出土した。

第3号溝は長さ2.4m、上面幅が45㎝～55㎝、底面幅30㎝～40㎝を測り、断面は逆台形を呈する。底面は平坦であり、堆積土は5層に区分されるが、単一の黒色スコリアを含有する黒褐色土である。土層中より、拳大の自然礫、土師器坏の細片が出土した。

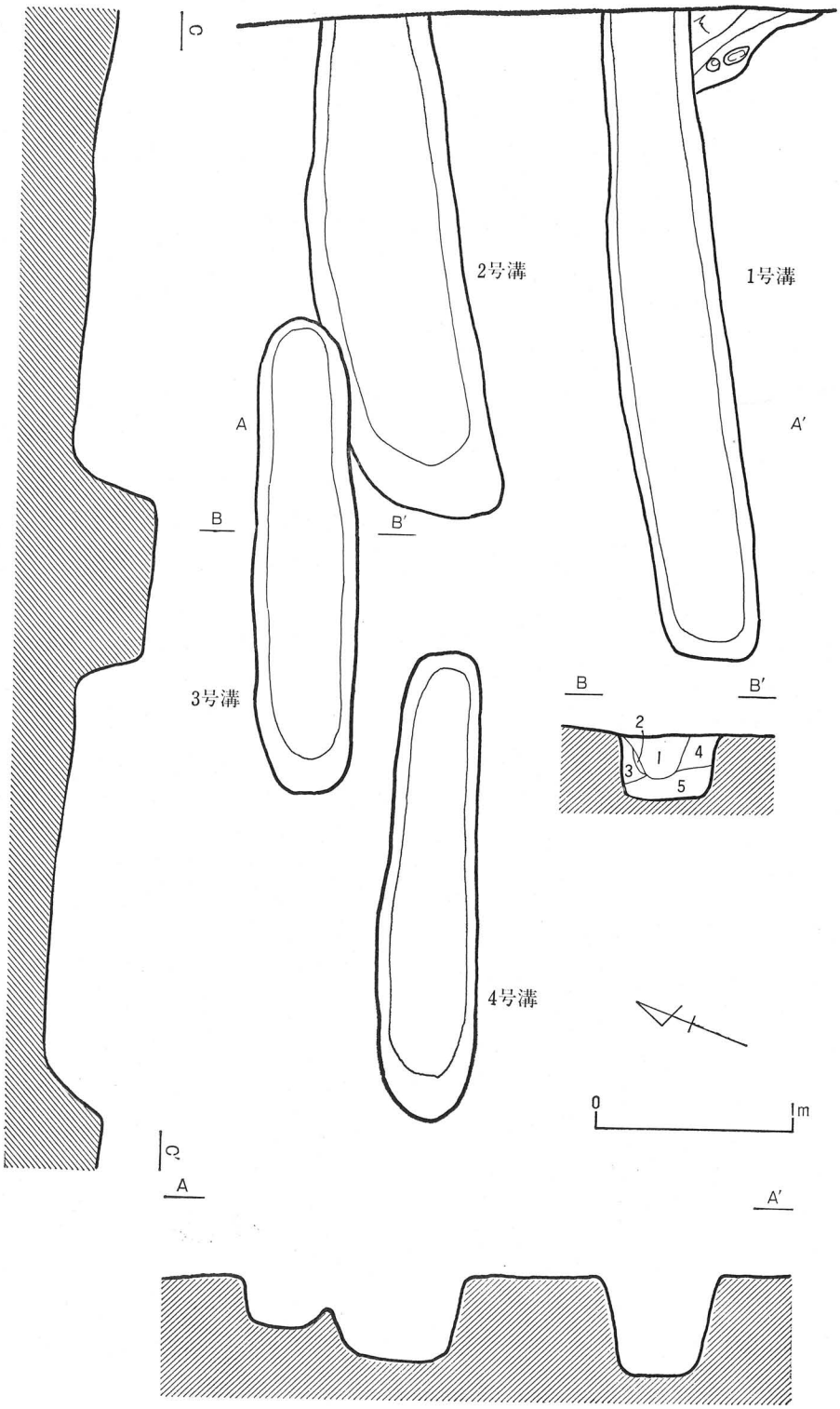
第4号溝は、第3号溝の南側に近接して存在し、上面幅は42㎝～50㎝、底面幅は30㎝～40㎝、断面形は逆台形で、深さは40㎝前後である。堆積土は、同様に黒褐色土で、層中より土師器坏細片が若干出土した。（小野寺）

ピット（第3図）

第1号住居址の北コーナー部に、住居址を切って構築される。長径75㎝、短径60㎝の隋円形プランを呈する。断面は円錐形であり、堆積土は黒色スコリアを含有する黒褐色土である。出土遺物なし。

土層説明（第3号溝）

第1層　（暗褐色土層）暗褐色を呈し、褐色土粒子を混入する。粘性は全くもたない。
第2層　（暗褐色土層）1層同様暗褐色を呈するが褐色土粒子を含まないため1層より暗い。
第3層　（暗褐色土層）2層と層的にはほとんど変わらないが粒性を全く持たないために2層とは区別される。
第4層　（黒褐色土層）1～3層と比較すると暗い、スコリアを多少混入する。
第5層　（褐色土層）明褐色ともいえるほど色調としては明るい。粘性は全く持たず褐色土粒子の混入がみられる。



第11図　溝状遺構

第2節　2　地　区

1　発掘経過

2地区は、本遺跡南向き緩斜面の北東部上段に位置する（第12図参照）。調査方法としては、まず4m×4mのグリッドを設定し、層位的に遺構確認を進めていき、漸次拡張していく予定であった。しかし、平安期遺構の確認面は、頭初の予想よりもはるかに深く地表面から約1.6mを測り、設定したグリッド16㎡を若干拡張するにとどまった。

表土剝ぎ作業は8月4日から開始した。8月8日には遺構検出作業を行い、グリッド東・南コーナー部に遺構の一部を、また掘立柱状遺構と考えられる柱穴3基を確認する。8月9日から12日まで検出遺構の覆土除去を行う。柱穴とグリッド東コーナー部遺構（第2号住居址）から骨片が出土し、南側土壙からは炭化物が出土する。14日には、第2号住居址より土師器羽釜口縁部破片が覆土上層中から、銅銭（隆平永宝）が覆土下層においてそれぞれ出土した。遺構の図面作成、写真撮影を行い、15日～16日埋め戻しをもって2地区の調査を終了する。

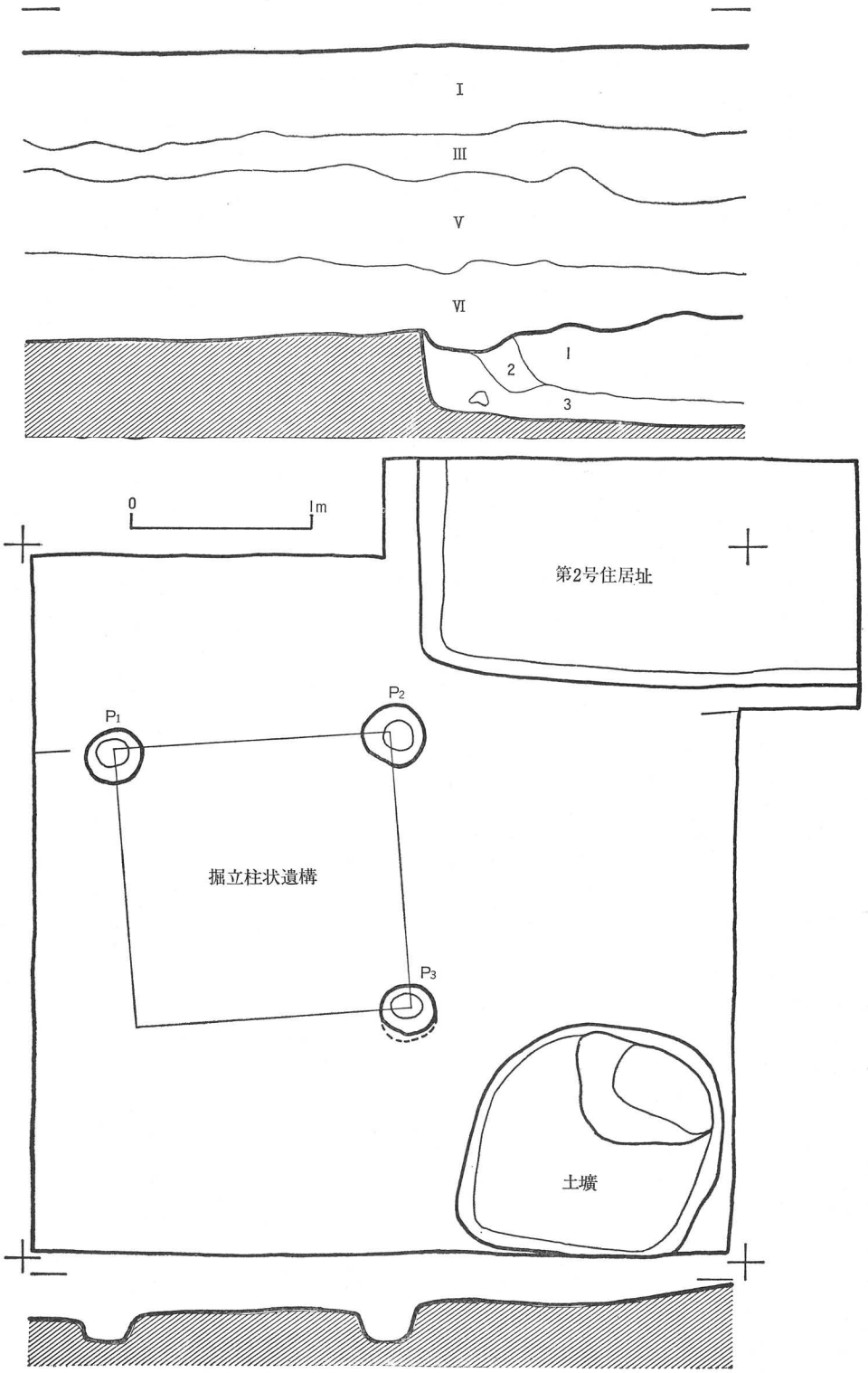
2地区で検出された遺構は、竪穴住居址1軒（第2号住居址）、隋円形土壙1基、掘立柱状遺構1軒である。

2　層　　序

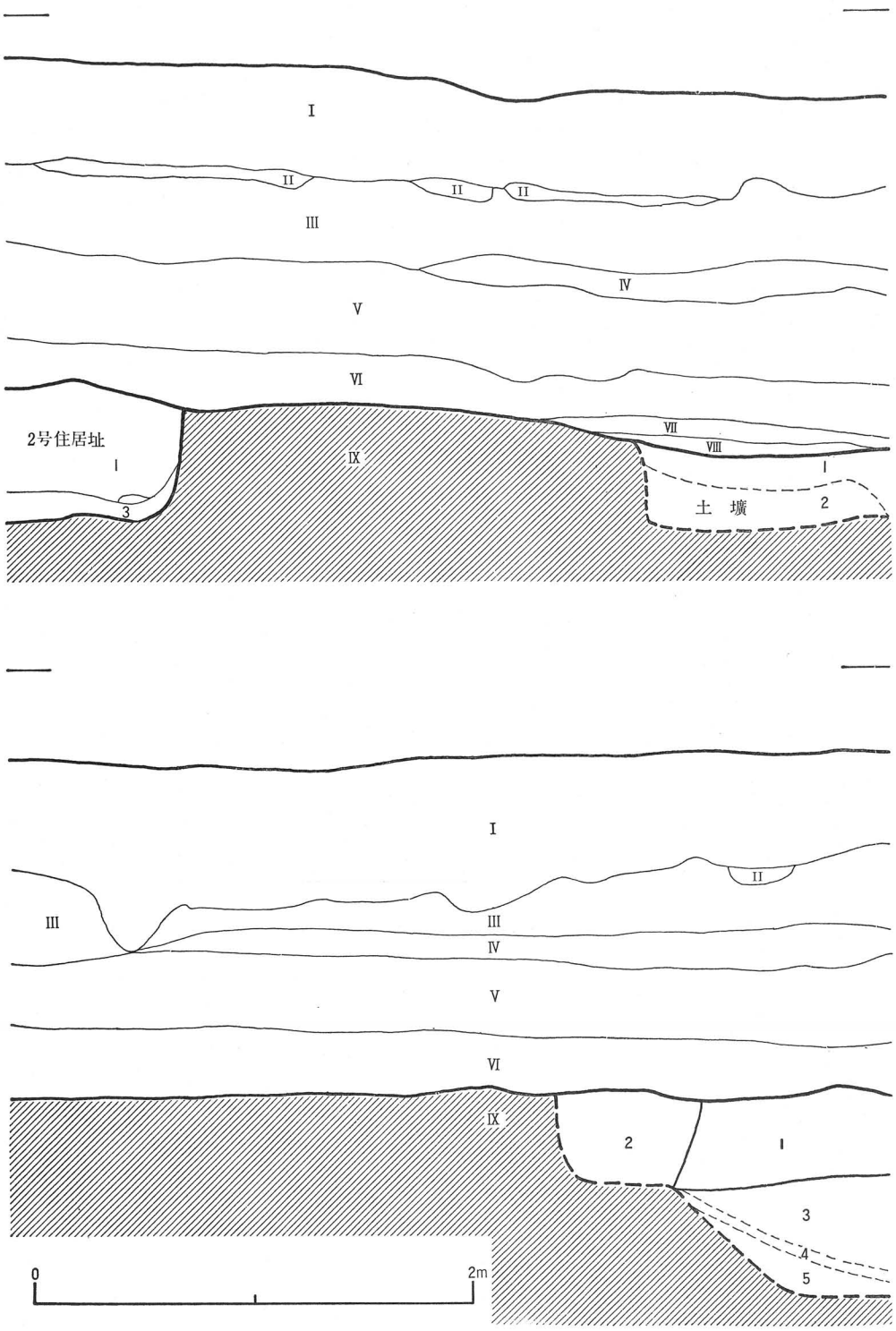
第Ⅰ層は暗褐色土、畑地耕作によって撹乱された土層である。第Ⅱ層は黒色土層であり、径2mm～10mm大の黒色のスコリアを多量に含有し、径1mm大の赤褐色粒子を若干含む。粘性、しまりともに弱い。第Ⅲ層は暗褐色土層で、基本的には第1層と同様の土層であるが、前者に比して粘性、しまりとも強い。径1mm～5mm大の黒色スコリア粒子をまばらに含有する。第Ⅳ層は暗褐色土層で、暗褐色土を基調とし、第Ⅲ層に比べ多量のスコリアを含有し、色調も暗い。第Ⅴ層は黒色土層であり、径1mm～5mm大の黒褐色スコリア粒子を多量に含有する。粘性は乏しい。第Ⅵ層は暗褐色土層であり、下層部においては径2mm～10mm大の黒褐色・赤褐色スコリア粒子を多量に含有する。粘性の乏しい、しまりのある土層で、平安期の遺物包含層である。第Ⅶ層は暗褐色土層で、第Ⅵ層に比べスコリア（2mm～5mm大）及び赤色粒子の含有がはなはだしく、粘性、しまりともに弱い土層である。第Ⅷ層は火山灰層であり、径2mm～10mm大の黒色及び褐色のスコリアからなり、ザラザラの層である。第Ⅸ層は褐色土層であり、平安期遺構検出の地山面である。

2地区における各層中の遺物出土状態は、第Ⅰ層～第Ⅲ層までその出土が確認されず、住居址等の遺構に伴うもののほか、第Ⅵ層から集中的に遺物の検出がなされた。ことに平安期出土遺物のうち灰釉陶器（大原2号窯式期）の出土量が多く注目される。

遺構の検出面は第Ⅸ層上面であり、第Ⅵ層が平安期遺構の覆土となっていた。



第12図　２地区遺構分布図


I
II
II
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
2号住居址
I
3
土　壙
I
2
I
II
III
III
IV
V
VI
IX
2
I
3
4
5
0
2m

第13図　土層・遺構図

3　遺構と遺物

第2号住居址（第12図）

本住居址は、2地区グリッドの東隅に確認された。遺構確認面は、スコリア含有褐色土層（第Ⅸ層）上面である。

本址が確認されたのは調査予定期間終了直前であり、グリッドを拡張して、遺構の全体を把握することはできなかった。検出できた遺構の範囲は、住居址西コーナー部、北西壁1.2m、南西壁2.9mのみである。主軸方向は不明であるが、おそらく第1号住居址と同様に南東壁に竈が構築されているものと推定される。コーナー部は隅丸方形を呈する。

遺構検出部分での最大壁高は北西壁で52cmを測る。床面は平坦で、確認面と同様に第Ⅸ層中にあり、壁際を除いて堅緻なものである。周溝、柱穴、貯蔵穴等の付帯施設は確認できなかった。

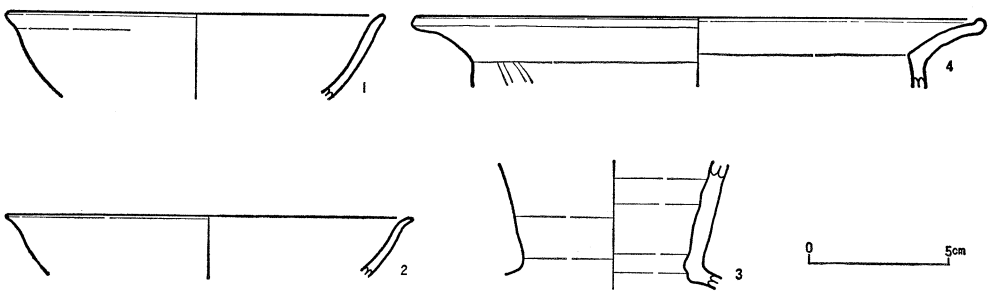
覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、3層に分層される。第1層は径2mm～5mm大の黒色スコリア粒子及び赤褐色スコリア粒子を多量に含有する暗褐色土層であり、粘性・しまりともに弱い。第2層は10mm大の大粒スコリアを含有する褐色土層。粘性には乏しいが、しまりは第1層より強い。第3層は2mm大の黒色スコリア粒子及び粘土粒子を含む褐色土層であり、粘性・しまりともに非常に強い。（近野）

出土遺物（第14図）

出土遺物は少く、図示した以外には土師器細片のみである。灰釉陶器（1～3）のうち、（1・2）は椀口縁部破片であり、（3）は水瓶の頸部破片である。土師器甕（4）は甲斐型の技法によりつくられた製品である。

鉄製品・銅銭（第15図）

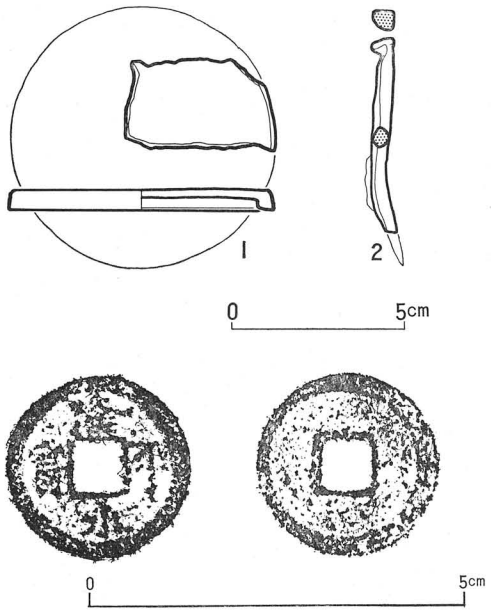
鉄製品（1・2）及び銅銭（隆平永宝）がある。（1）は直径7.8cmを測り、縁辺部にかえりのつく蓋状の鉄製品である。（2）は角釘をなし、断面は方形を呈している。現有長は5.7cmで、先端部を欠損する。隆平永宝は床面から10cmほど上層の第3層中より、ほぼ水平状態で出土した。



第14図　第2号住居址出土遺物

第3表　第2号住居址出土土器表

土器番号	種　類	器形	法　量 口径 底径 器高	器形の特徴	整形の特徴	胎　土	備　考
1	灰釉陶器	椀	13.5	内湾する側部から口縁部はわずかに外反する。	内・外面ともナデ調整。	大粒の石英を含む。	内面のみ施釉
2	灰釉陶器	椀	14.5	内湾する側部から口縁部は外反する。	外面は工具による調整。口縁部・内面は横ナデ。	白色微粒子を含む。	内面には灰が付着
3	灰釉陶器	壺		頸部と胴部は個々に造って接合。	頸部外面は横ナデ。	石英・黒色粒子を含む。	
4	土師器	甕	20.7	やや膨む胴部から水平に近く「く」の字状に外反し、口唇部は上へ折れまがる。	口唇部は爪・指腹による横ナデ・内・外面ハケ目。	大粒の石英・砂粒を含む。	甲斐型甕



第15図　第2号住居址出土遺物

掘立柱状遺構（第12図）

本址は、グリッドの中央部から北側にかけて検出され、第2号住居址の西側に位置する。遺構検出面は、スコリア含有褐色土層（第Ⅸ層）上面である。プラン確認の段階では不確実なものも含めて6個の柱穴が確認されたが、精査の結果、3個となった。P_1から南東方向にP_2、P_2を基点として南西方向に直角にP_3が存在し、P_1～P_2、P_2～P_3の柱穴間はともに1.6mを測り、おのおのの柱穴の上面プランはすべて円形、底面も上面に比例して円形であり、かつ平坦である。ともに直径は上面径約30cm、底部径約15cmを測る。なお、P_3は南西部側が5cm前後オーバーハングしている。底部はP_1～P_3ともに第Ⅸ層であり、非常に硬化している。

覆土はいずれも暗褐色土を基調とし、P_3については若干の粘土ブロックの混入がみられた。

遺物は、P_1から土師器細片2点及び骨片、P_2から土師器細片1点がそれぞれ出土した。なお本址の区域から多量の土師器、灰釉陶器（第16・17図）が集中的に出土していることから、これらの遺物は掘立柱状遺構と密接な関係を有するものと推定される。遺物から判断すると11世紀代の建物と考えられる。（近野）

土壙（第12図）

本遺構は、2地区グリッド南隅に位置する。遺構検出面は第Ⅸ層上面である。平面プランは南北径136cm、東西129cm、深さ40cmの隅丸方形に近い不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、底面は、北側では褐色土でしまりがあり、南側は暗褐色土で軟弱であり、南側に向かって傾斜している。南東側壁面上部で一部に幅4cm～8cmの大粒スコリアの堆積層が確認された。南東部底面には、南北84cm、東西54cmの不整形の落ち込みがある。北から南に向かって幅

20cmのテラスを有し、壁面には幅４cmの粒子の細い灰黒色火山灰層が北から南へ向かって傾斜をなして確認された。

出土遺物については、実測可能なものはないが、北側褐色の覆土中より土師器細片19点と多量の炭化物及び骨片が出土した。（滝島）

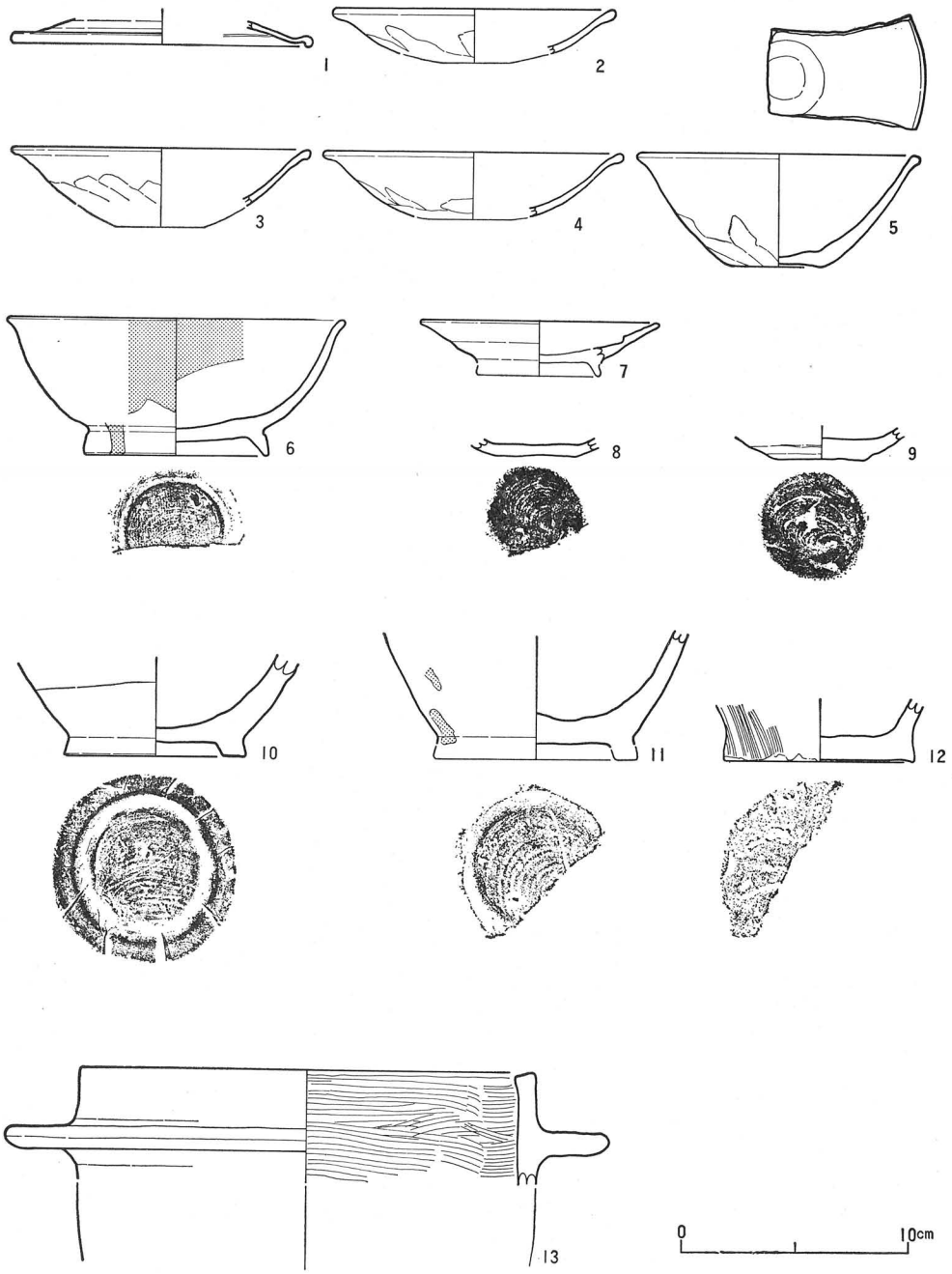
グリッド出土遺物（第16・17図）

包含層（第Ⅵ層）からの遺物の出土量は多いが、その個体数は図示したものでほぼ占められているといってよい。図示した以外の遺物は土師器坏細片数個体分のみである。土師器蓋（１）側部斜めヘラケズリ整形の皿（２）、同様の調整を施す坏（３～５）があり、いずれも甲斐型坏の範疇でとらえることができる資料である。型式学的には甲斐地域編年の第Ⅺ期あたりに比定される遺物であろう。坏（５）は代用硯として再利用されている。羽釜（13）のほか、甕（12・14～17）、小型甕（19）があり、甲斐型甕のうち土師器坏暗文消滅期以降の時期の所産と考えられる。灰釉陶器については、椀（６）の施釉方法は漬けがけであり、大原２号窯式期の製品と考えられる。底部に糸切り痕を有する。段皿（７）は黒笹90号窯式期の製品と推定され、長頸壺底部（10・11）は猿投窯系の製品と考えられる。

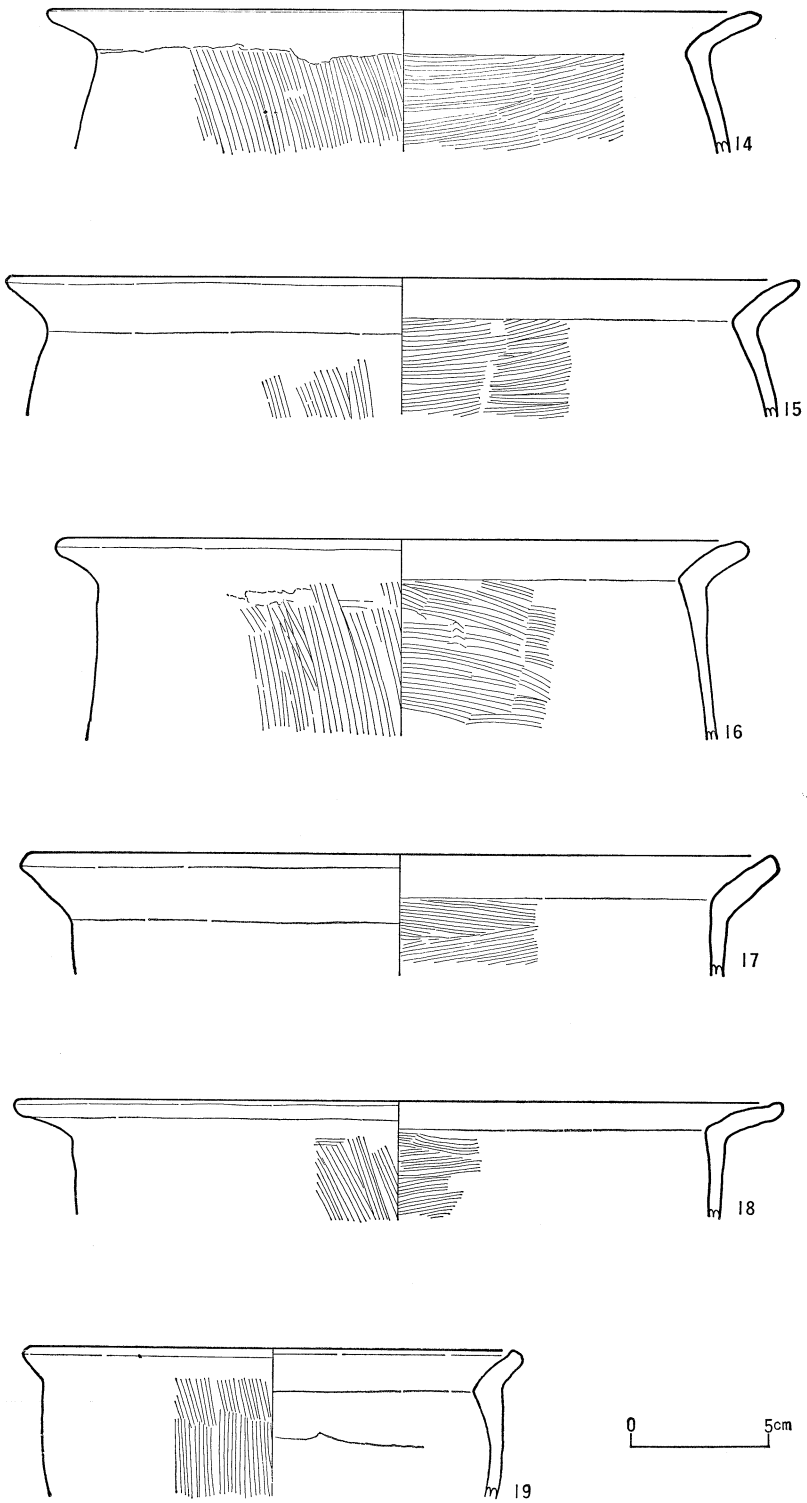
第４表　２・３地区グリッド内出土土器表

土器番号	種類	器形	法量 口径 底径 器高	器形の特徴	整形の特徴	胎土	備考
1	土師器	蓋	13.3	口縁部は肥厚し直立する。薄手のつくりである。	側部内面は横位ヘラミガキ。		丁寧なつくり
2	土師器	皿	12.5	側部は内湾ぎみに立上がり、口縁部はやや外反し、玉縁をなす。	側部下半は斜めヘラケズリ。	赤褐色粒子を含む。	
3	土師器	坏	13.2	側部は内湾ぎみに立上がり、口縁部は緩く外反する。	側部下半は斜めヘラケズリ。	赤褐色粒子を含む。	
4	土師器	坏	13.3	側部は内湾して立上がり、口縁部で外反する。	側部下半は斜めヘラケズリ。底部は不定方向ヘラケズリ。	赤褐色粒子を含む。	
5	土師器	坏	12.1　4.3　5.1	みこみの深いつくりで、側部は内湾して立上がる。口縁部は玉縁。	側部下半は斜めヘラケズリ。底部は不定方向ヘラケズリ。	赤褐色粒子を含む。	代用硯
6	灰釉陶器	椀	14.9　8.2　6.1	側部はゆるい丸味をもち、口縁部が若干外反する。高台は畳付部が丸味をもって尖る。	底部は糸切り。高台周縁部は横ナデ。	石英を含む緻密な胎土。	大原２号窯式期
7	灰釉陶器	段皿	10.6	側部は直線的に開く。側部内面に段を有する。	口縁部は横ナデ。	石英を含む。	
8	土師器	皿	3.6	側部はゆるやかに開く。	底部は糸切り後無調整。	赤褐色粒子を含む。	
9	カワラケ？	皿	4.0	厚手のつくり。	底部は糸切り後無調整。	胎土は粗い。	

10	灰釉陶器	長頸壺	8.0	高台は外開きに付けられる。	底部は糸切り。高台周縁部は横ナデ。	石英を含む黄色味がかった胎土。	篠岡製品？
11	灰釉陶器	長頸壺		高台は外開きに付けられる。	底部は糸切り。高台周縁部は横ナデ。	石英を含む粗い胎土。	東濃製品
12	土師器	甕	8.5	底部から直線的に立上がる。	底部は木葉痕。外面は縦位ハケ目。	石英・砂粒を含む。	
13	土師器	羽釜	20.0	胴部から直線的に立上がる。鍔は水平に付される。	内面は横位ハケ目。	石英・砂粒を多量に含む。	
14	土師器	甕	25.9	胴部は緩い球形状をなして膨らみ口縁部は「く」の字状に大きく外反する。	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位に、内面は横位にハケ目調整。	石英・砂粒を含む。	
15	土師器	甕	28.7	胴部はやや膨らみ、口縁部は緩く「く」の字状に外反する。最大径は胴部上半になる。	胴部外面は雑な縦位のハケ目、内面は横位ハケ目。	石英・砂粒を多量に含む。	
16	土師器	甕	25.2	胴部下半に最大径を有し、やや内傾しながら立上がり、「く」の字状に外反する。口縁は若干肥厚し、かつ短い。	胴部外面は縦位、内面は横位ハケ目。	石英・砂粒を含む。	
17	土師器	甕	27.5	円筒状の胴部から口縁部で緩く「く」の字状に外反する。口縁部は肥厚化の傾向がみられる。	胴部内面は横位ハケ目。	砂粒を若干含む。	
18	土師器	甕	27.8	緩かに膨む胴部から口縁部は大きく「く」の字状に外反する。	胴部外面は縦位、内面は横位ハケ目。	石英・砂粒を含む。	3地区出土遺物
19	土師器	小型甕	18.1	胴部は緩い球形状をなして膨み、口縁部は弱く「く」の字状に外反する。	胴部外面は縦位ハケ目。内面は雑な横ナデ。	石英・砂粒を含む。	



第16図　２地区グリッド内出土遺物



第17図　２・３地区グリッド内出土遺物

第3節　3　地　区

1　発掘経過

3地区は背戸山南麓緩斜面の標高約800mに位置する。斜面は北東に高く南西に向かって低くなっている。今回調査した地区の中では最も標高の高い地点で、現状は休耕地である。

調査方法は、トレンチ方式で行い、南西から北東方向に緩斜面に沿って長さ20m、幅2mでトレンチを設定した。南西を基点にし、おのおのを2m×4mの区分として、A～Eグリッドとした。

発掘調査は8月4日より開始し、Aグリッドから順次Eグリッドまでの表土剝ぎ作業を行った。C～Eグリッド表土中より近世の製品と考えられる陶磁器類、鉄製品が多量に出土する。8月6日より遺構検出作業を行い、Cグリッドで隋円形の土壙（第1号土壙）を、C・Dグリッドにかかる土壙（第2号土壙）及び、C～Eグリッドの西壁に沿って溝状遺構が確認され、D・Eグリッドにおいては、削平面が検出される。ひきつづきこれらの遺構の覆土除去作業を行い、実測、写真撮影後、8月15日に埋めもどしをして、作業を終了した。

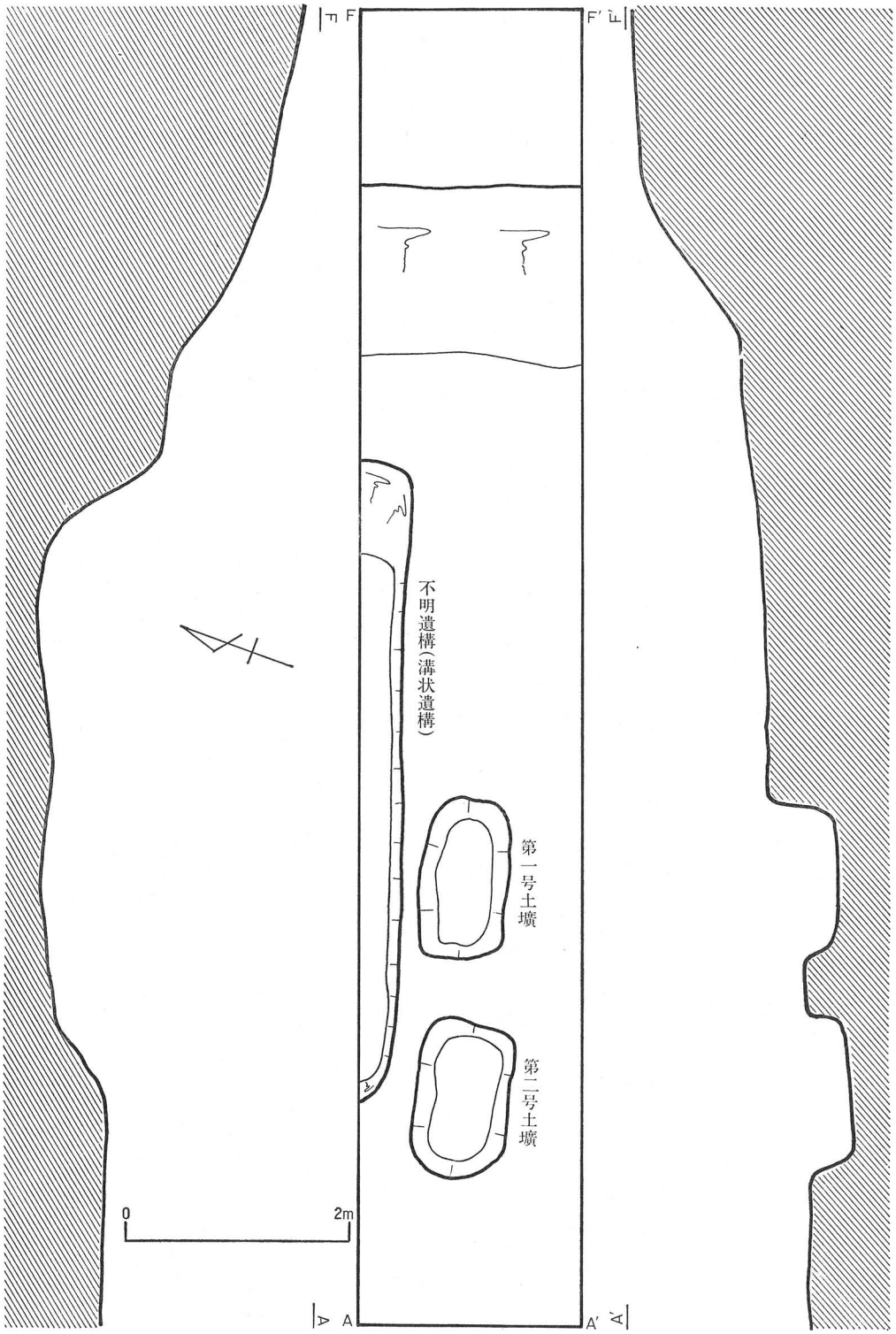
3地点の遺構は、いずれも近世に属するものと考えられる。山麓緩斜面を人為的に削平し、整地面を形成する。遺構は整地面から切りこまれ構築されている。検出された遺構は、土壙2基（第1・2号土壙）、溝状遺構である。　（竹野）

2　層　　序

第Ⅰ層は耕作土層で、径10mm大の黒色スコリアを多量に含有する。第Ⅱ層は基本的には第Ⅰ層と同様の黒褐色土を基調とする土層であるが、第Ⅰ層に比して黒色スコリアの混入が少なく、固くしまった土層である。第Ⅲ層は暗褐色土で、径5mm大のスコリア粒を多量に含み、黄褐色粒子（1mm大）を若干含む。色調は第Ⅰ層よりも明るい。第Ⅳ層は暗褐色土層であり、第Ⅲ層と同質のスコリア粒、黄褐色粒子を前者に比して少なく含み、色調もやや暗い。第Ⅴ層は暗褐色土層であり、径5mm大のスコリアを少量、黄褐色粒子（1mm大）をわずかに含む。第Ⅵ層は暗褐色土層で、第Ⅴ層に近似するが、色調は明るく褐色に近い。第Ⅶ層はスコリア含有褐色土層で、近世遺構の地山面となっている。

各層は相対的に南西側に向かって堆積が厚くなっているが、第Ⅱ層についてはD・Eグリッドのみに存在する。発掘調査時の観察から、建物を構築するため第Ⅰ・Ⅱ層を掘り込み、第Ⅳ層の上面を生活面として造成し、近世の住宅（民家）を建築したものと推定される。しかし、第Ⅳ層上面での遺構検出はなされず、第Ⅶ層の上面が遺構確認面である。

遺物の出土状態は　第Ⅰ・Ⅱ層中より近世以降の製品と考えられる多数の陶磁器片が出土した。第Ⅳ層において、平安期10世紀段階に比定される土師器細片が若干確認された。これらの遺物は、整地面削平の際、包含層が破壊され混入したものであろう。



第18図　３地区遺構分布図

土層説明

第Ⅰ層（耕作土層）　黒褐色土を基調とする。1㎜大のスコリア粒を多量に含み、色調は最も暗い。

第Ⅱ層（黒褐色土層）　1層よりも少なくスコリア粒を含む。色調は1層よりも明るい。

第Ⅲ層（暗褐色土層）　5mm大のスコリア粒を多量に、黄褐色粒子を若干含む。色調は1層よりも明るい。

第Ⅳ層（暗褐色土層）　3層と同質のスコリア粒、黄褐色粒子を3層よりやや少なく含む。色調は3層よい暗い。

第Ⅴ層（暗褐色土層）　5mm大のスコリアを少量、黄褐色粒子を若干含む。粘性・しまりは弱いが、色調はⅢ層に近似する

第Ⅵ層（暗褐色土層）　含有物質はⅤ層と同様であるが、色調はⅤ層より明るく褐色に近い。

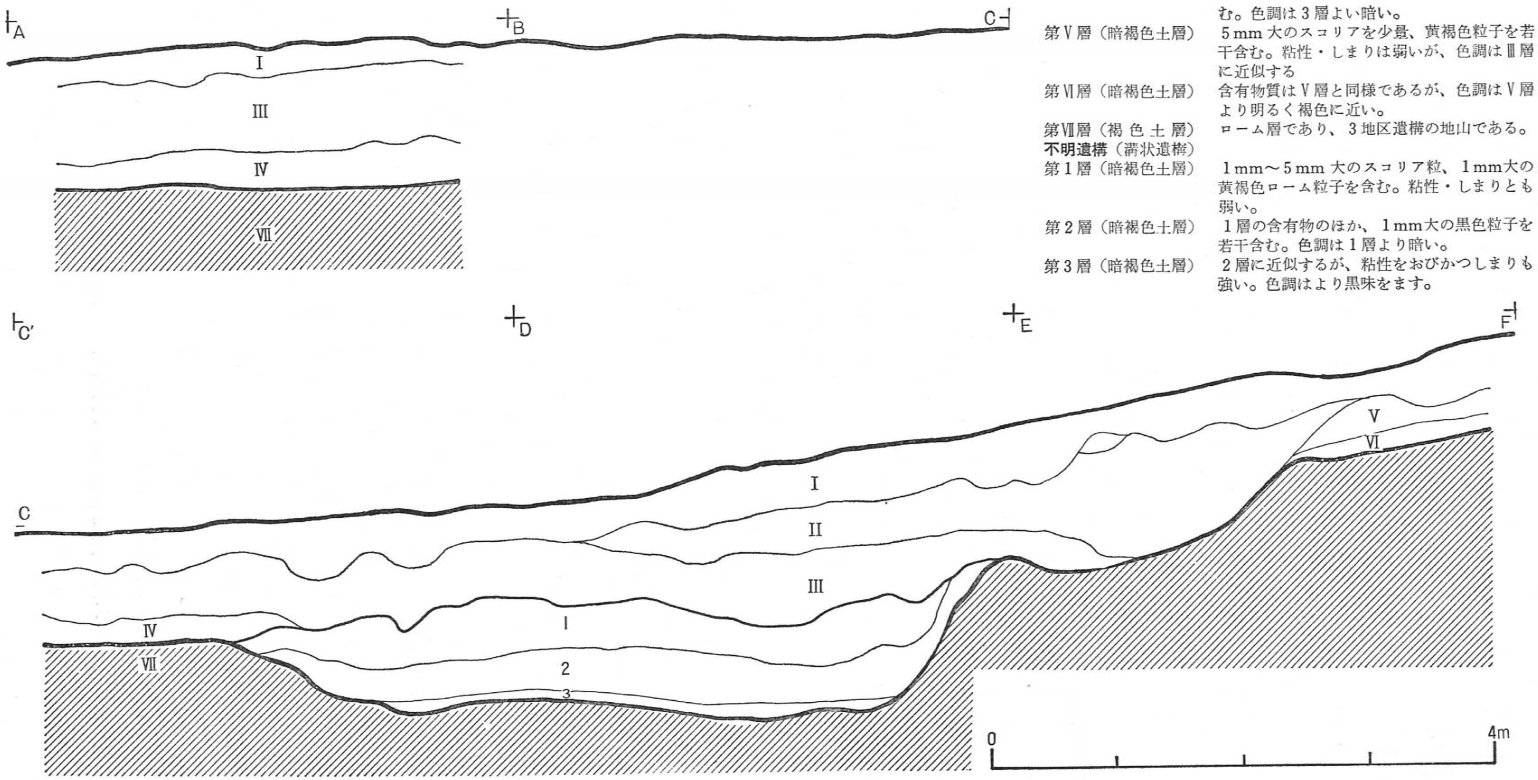
第Ⅶ層（褐色土層）　ローム層であり、3地区遺構の地山である。

不明遺構（溝状遺構）

第1層（暗褐色土層）　1mm～5mm大のスコリア粒、1mm大の黄褐色ローム粒子を含む。粘性・しまりとも弱い。

第2層（暗褐色土層）　1層の含有物のほか、1mm大の黒色粒子を若干含む。色調は1層より暗い。

第3層（暗褐色土層）　2層に近似するが、粘性をおびかつしまりも強い。色調はより黒味をます。



第19図　3地区土層図

3　遺構と遺物

第１号土壙（第20図）

本土壙は、Ｃ・Ｄグリッドにかけて位置する。確認面は褐色土層（第Ⅶ層）上面である。形状は不整惰円形を呈す。規模は上縁部で、長軸1.46m、短軸0.83m、底面幅は長軸1.10m、短軸0.51m、深さは最深部で0.33mを測る。壙底はほぼ平坦であり、壁は底部よりゆるやかに立ち上がっている。壁面底部近くにはベルト状に火山灰層が確認され、底面は火山灰層を完全に掘り込んで構築される。

覆土は基本的には単一土層であるが８層に分層される。第１～５層が暗褐色土層、第６・７層が褐色土層、第８層は火山灰層である。

出土遺物はないが、近世建築物に関係する遺構であろう。（関根）

第２号土壙（第20図）

本土壙は第１号土壙の南西側に近接し、Ｃグリッドに位置する。確認面は同様に第Ⅶ層の上面である。形状は不整惰円形であり、主軸方向も一致する。規模は上面部で長軸1.45m、短軸0.83m、底面で長軸1.03m、短軸0.52m、深さは最深部で0.37mを測る。壙底はほぼ平坦であり、壁は底面よりゆるやかに立ち上がっている。第１号土壙と同じくベルト状の火山灰層が壁面立ち上がり部分に確認された。

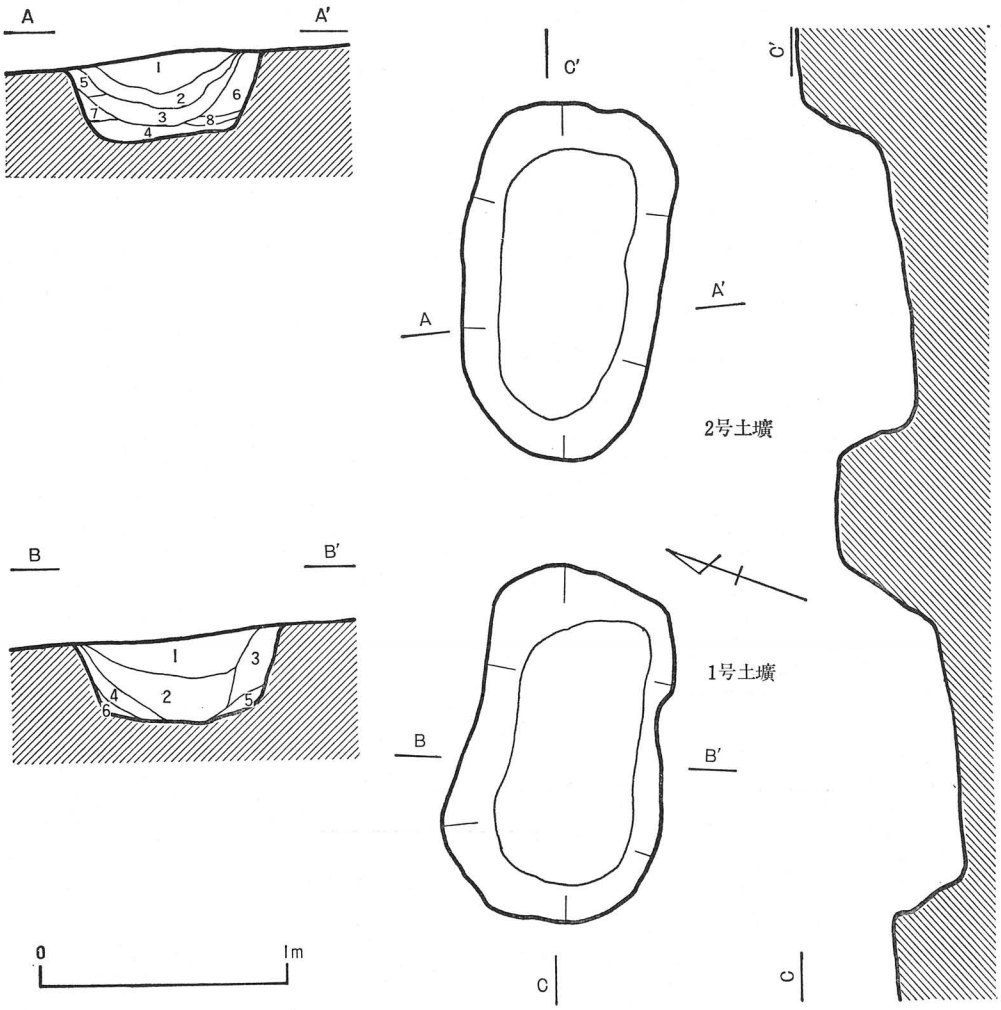
覆土は単一の暗褐色土層であるが６層に分かれる。第１～２層、４～５層が暗褐色土層、第３層が褐色土層であり、第６層が火山灰層である。出土遺物はないが、第１号土壙と同一の遺構であろう。（加藤）

不明遺構（溝状遺構）

Ｃ～Ｄグリッドの西側に位置し、遺構の主体部は発掘区の北西側に延びるため全掘はできなかった。人為的な削平により整地された平坦面を掘り込んで構築される。確認面はスコリア含有褐色土層（第Ⅶ層）であった。

全体を発掘していないため、形状は不明である。長さ5.8m、調査区域内での最大幅0.48mを測り、コーナー部は隅丸の長方形を呈する。上面幅と底面幅の比率は、北壁では約１m、南壁では0.4mを測り、それぞれ緩やかに立ち上がる。

堆積土は以下のとおりである。第１層は暗褐色土層で、径１mm～５mm大のスコリアと１mm大の黄褐色粒子を含む。粘性、しまりともに弱い土層である。第２層は同様に暗褐色土層で、同質の含有物を含むが、色調はより暗い。第３層は、前二者と同質の土層であるが、黒色に近い色調を呈する。第１～３層は、基本的には単一土層であり長い時間を経ず、一気に埋没した土層と考えられる。出土遺物なし。遺構の性格は不明であるが、地形観察のうえからは、２地区グリッドの北西側を山道まで続くものと推定される。（鈴木）



土層説明

第１号土壙

第１層（暗褐色土層）	粘性は若干あり、しまりは弱い。
第２層（暗褐色土層）	１層よりも色調はやや暗い。粘性、しまりは１層と同様。
第３層（暗褐色土層）	１層に近似する。
第４層（火　灰　層）	灰黒色を呈するスコリアからなる火山灰層。
第５層（暗褐色土層）	暗褐色土を基調とし、黄褐色のローム粒子を混入する。
第６層（暗褐色土層）	含有物は３層と同質であるが、色調は３層よりも明るい。
第７・８層（褐色土層）	粘性、しまりとも弱い。

第２号土壙

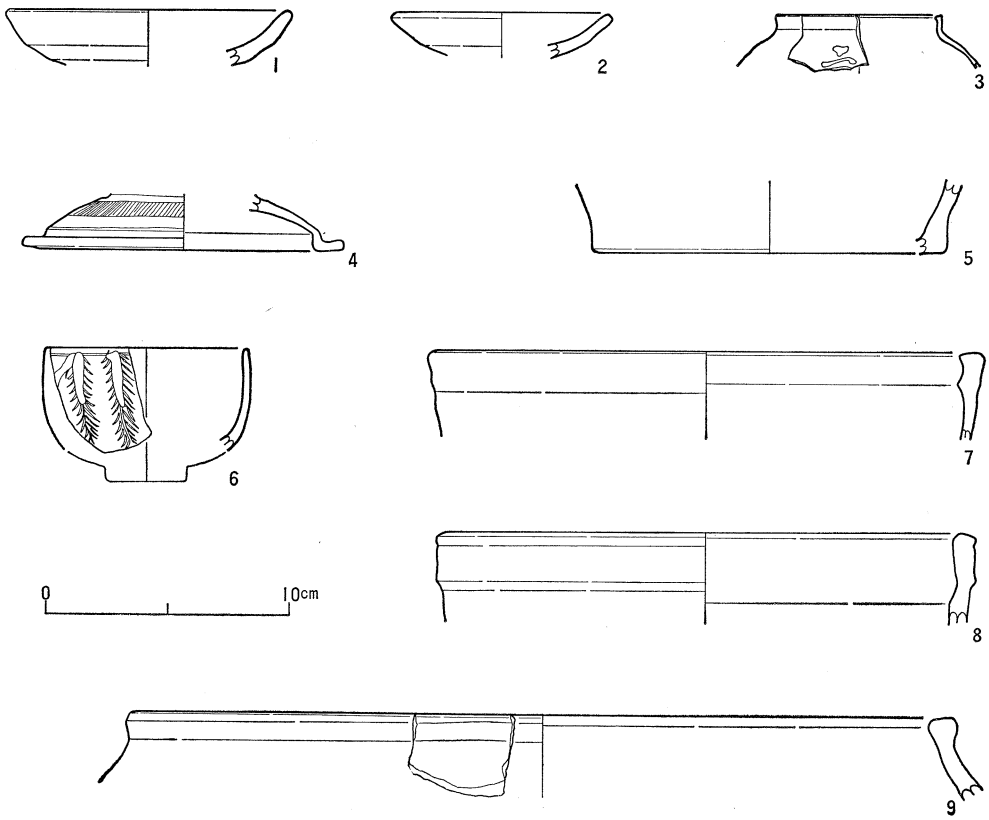
第１層（暗褐色土層）	粘性は若干あるが、しまりは弱い。
第２層（暗褐色土層）	黄褐色粒子を混入し、色調は１層よりも明るい。
第３層（褐色土層）	粘性はあるが、黄褐色粒子を多量を混入する。しまりは弱い。
第４層（暗褐色土層）	色調は1･2層より明るく、黄褐色ローム粒子の混入が多い。
第５層（暗褐色土層）	４層と同質の土層。
第６層（火山灰層）	灰黒色を呈するスコリアからなる火山灰層。

第20図　１・２号土壙

トレンチ出土遺物（第21図）

トレンチ内よりの出土遺物は、第17図（18）の平安期土師器甕をのぞき、他はすべて近世以降の陶磁器類と鉄製品であった。

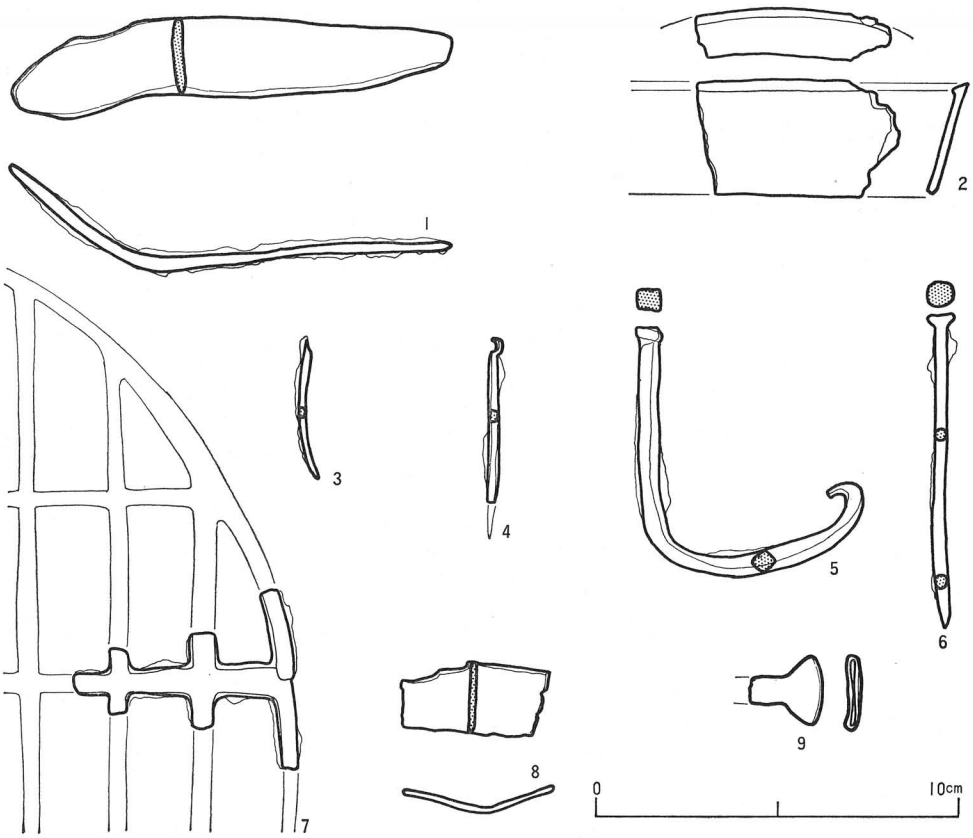
皿（１・２）のうち（１）は陶器皿であり、灰釉が塗布される。（２）は磁器皿口縁部破片で、内外面に飴釉が掛る。（３）は磁器製品であり、象牙色の釉が掛る。茶壺と考えられる。蓋（４）は磁器製品であり、飴釉が掛る。急須などの蓋であろう。（５）は内耳土器の胴下部片である。染付椀（６）は現在の湯呑茶椀であろう。黄緑色釉深鉢（７）は口縁部が肥厚して直線的に立ち上がる。内外面に釉が掛る。瀬戸製品である。深鉢（８）は陶器製であり、口縁部で稜をなし、ほぼ直線的に立ち上がる。素地は黄白色をなして、焼成は悪い。褐色釉が掛る。（９）は（８）と同質の釉、胎土をなす甕の口縁部破片である。



第21図　３地区出土遺物

鉄　製　品（第22図）

（１～８）は鉄製品である。（１）は鎌状の製品である。最大長は12.3cm、最大幅は2.3cmである。（２）は、ほうろく型鉄鍋の胴部片である。器高は3.2cm。（３～５）は用途不明の製品である。（３）は現有長3.9cm、断面は円形である。（４）は現有長4.6cmであり先端部を欠損する。釘（６）は、全長8.7cmを測る丸釘であり、近代以降の製品であろう。（７）は火格子（ロストル）の破片であろう。（８）は鉄製品の小破片であり、器形は不明である。



第22図　３地区出土遺物

第Ⅳ章　ま　と　め

第1節　平安時代

古屋敷B遺跡の平安期集落は、第2号住居址を北限として、東は古宮（大明見浅間神社旧所在地）付近まで、西側は古屋敷A遺跡を含む領域で営まれていたことがほぼ判明した。今回発掘調査を実施したのは、該期集落の北限部にあたる地点であった。

1　竪穴住居址について

竪穴住居址は、第1・2号住居址の2軒が検出された。第1号住居址は東壁部がグリッド外にかかるため全掘できず、また第2号住居址についても南西コーナー部の部分的な調査にとどまった。

これら2軒の住居址は、その出土遺物により平安時代の10世紀以降のものであることが判明した。

第5表　竪穴住居址一覧表

遺構No.	規　　模	プラン	主軸方向	時　期	備　　考
1	4.3m×3.8m	長方形	E—32—S	平安期	東竈　床下土壙
2			E—18—S	平安期	東竈

2　土器群について

本遺跡で検出された2軒の竪穴住居址の伴出遺物については、10世紀後半代と11世紀前半代の2時期に位置づけられるが、土器の特徴と組成を述べたうえで各期の編年的位置づけを行いたい。

Ⅰ　　期（第14図）

第2号住居址の出土土器群が該当するが、出土点数が少なく良好な資料とは言いがたい。土師器坏は細片のみで実測可能な遺物は少ないが、基本的には側部下半を斜めヘラケズリし、底部についてもヘラケズリ整形を施す、底部の小さい製品であり、暗文を施すものはみられない。甕（4）は甲斐型の製品であり、口縁部の肥厚化傾向は顕著でない時期の資料である。ハケ目を多用する長胴形を呈し、口縁部は薄く頸部が大きく外反する。なお、第16図の羽釜(13)は第2号住居址覆土最上面から出土しており、本址に伴う遺物である。ハケ目調整を施し、やや小ぶりの製品である。これらの資料は前述坂本他「甲斐地域」編年によれば第Ⅹ期に並行するものと考えられる。

Ⅱ　　期（第7・8図）

第1号住居址出土土器群のセットを中心とする。土師器坏（1～3）は、側部下半部をナナメヘラケズリ・底部整形のヘラケズリは全くみられない時期の資料である。口縁部から側部下

半まで横ナデされ、二次的整形は認められない。底部破片についても回転糸切り未調整である。甕（7・8）は甲斐型の製品である。口縁部が肥厚し、厚手の胴部へ移行する。形態は「く」の字状に直線的に屈曲する。甕（10）と羽釜（9）はハケ目の稀少な、ナデ調整の製品であり、胎土も甲斐型甕と異なる。灰釉陶器は東濃系の大原2号窯式期の製品である。前述編年Ⅺ期に比定され、土師器坏・甕製作工程における革新がなされ量産化への道がひらかれた画期と考えられる。

つぎにⅠ・Ⅱ期の年代観について触れておきたい。Ⅰ期は10世紀前半代に位置づけられる。この時期の資料としては、発掘資料ではないが、市内西丸尾遺跡出土の遺物と対比しうるものであり、暗文坏の消滅期という点で、西丸尾遺跡よりも新しい様相を持つ。西丸尾遺跡を覆った熔岩流の流出年代は、『日本紀略』の承平9年（937）の条に「富士山神火によって湖を埋む」とされる記述と同一とされるならば、10世紀前半代のうち937年以降の年代が導き出せるであろう。

Ⅱ期は11世紀前半の年代観が与えられる。土師器坏は伝統的な甲斐型の技法が消滅後の製品であり、灰釉陶器は東濃系の大原2号窯式期の製品である。

3　金属製品について

本遺跡出土遺物のうち平安期に属する金属製品は、合計14点を数え、他に鉄滓が多数出土している。金属製品のなかで、鉄地外面銀張りの用途不明製品、環状青銅製品を除いて、その他は鉄を素材とするものである。これらの製品は、第1・2号住居址及びその周辺の包含層中から出土したものである。鉄製品の内訳は鏃1点、鎌1点、刀子2点、錐1点、釘2点と用途不明製品7点であった。鏃は山田水呑遺跡東部第2層出土のものと同形態であるが、住居址に伴出する例はほとんど知られていない。鎌は木質部がわずかに遺存し、釘を打って木片と接合した痕跡が観察される。錐については完形の棒状の製品が1点出土している。断面は方形を呈するが、両端に向かってわずかに細くなり、先端部付近の断面は角がとれて丸くなり尖っている。以上の点から錐と判断した。釘は折頭式の角釘である。

本遺跡においては、総数7点にのぼる鉄滓が出土している。限定された範囲内での調査であり明瞭な鍛冶遺構を検出するまでには至らなかった。拳大のものから小片まで、大きさにばらつきがあり、小孔を有し流動性があるものが多い。今後鍛冶遺構の検出につとめ、また出土鉄滓の化学的分析を行う必要があろう。

4　鞴羽口について

本遺跡においては1地区包含層（第Ⅷ層）から3点、2地区包含層（第Ⅵ層）から1点、計4点の鞴羽口が出土している。今回の調査は限定された範囲内での調査であったため明瞭な鍛冶址は検出されなかった。外状による分類は不明瞭であるが、4点の出土遺物のうち、（3）はガラス化が著しい。胎土中には、いずれも井草状繊維やその擦痕が観察され、（1）の表裏面の擦痕もその繊維によるものかも知れない。

集落址の発掘においては、明確な製鉄・鍛冶遺構が確認されない場合が多く、本遺跡も同様であるが、今後の調査によって、小鍛冶遺構の実態が明らかになることが期待される。

なお、本遺跡の南東350m の地点には金山神社が祀られている。

第6表　鞴羽口一覧表

遺物No.	出土地区	出土位置	遺存状態	胎　土	色　調	焼　成	遺存計測数値(cm)	備　考
1	1地区	Ⅷ層	基部のみ¼周残存	良好な粘土。繊維質を含む。	表面は灰褐色 裏面は赤褐色	非常に堅く焼きしまり、断面の一部はガラス化している。	外径3.4～1.9、孔径1.9～1.2、高さ3.7、器厚1.5	内・外面とも整形時の縦位擦痕が観察される。
2	1地区	Ⅷ層	胴部片	良好な粘土。断面に繊維痕あり。	表面は灰褐色 裏面は赤褐色	非常に堅く焼きしまる。	外径2.5～2.2、孔径1.4～1.1、高さ2.3、器厚1.3	断面に井草状の繊維痕。
3	1地区	Ⅷ層	胴部片	良好な粘土。不透明白色粒子を含む。	表面・断面は黒色 内面は赤褐色	非常に堅く焼きしまり、全体にガラス化している。	外径1.8～1.0、孔径1.0～0.5、高さ2.3、器厚1.7	断面はガラス化しており、表面は気泡のため泡状。
4	2地区	Ⅵ層	胴部片、外面は剝離	良好な粘土。不透明白色粒子を含む。	内面は赤褐色	非常に堅く焼きしまる。	孔径1.6～0.7、高さ2.2	断面に繊維痕。

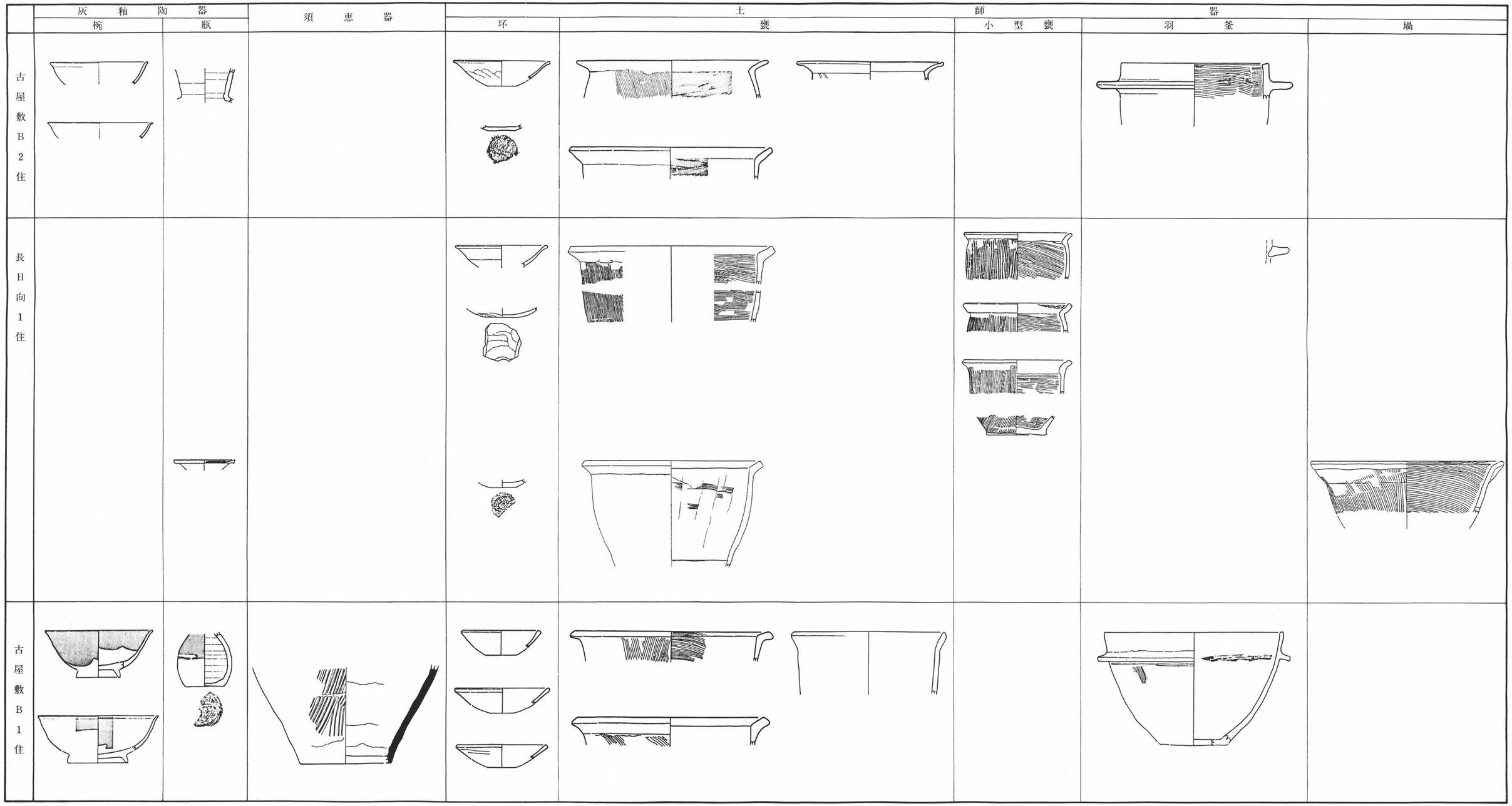
5　鉄滓について

鉄滓も鞴羽口と同様に、1地区から集中的に出土している。その内訳は、第Ⅵ層から1点、第Ⅷ層から5点、出土層位不明のものが1点、1地区の総数は7点にのぼる。2地区においても小鉄滓が1点出土したが、きわめて多い出土といえる。これらのうち、鉄分が多く全体の形状が整っているものが3点（1・3・4）あり、あるいは小鍛冶原材料の鉄かも知れない。

このように本遺跡においては、鞴羽口と鉄滓が、小範囲の調査にもかかわらず、多数出土した。このことは、今後、本遺跡の実態の解明に向けて調査を行ううえでの新たな課題の一つであろう。

第7表　出土鉄滓一覧表

No.	出土位置	遺存計測数値(g)(cm)				備　考
		重　量	長　さ	幅	厚　さ	
1	1地区北Ⅵ層	330	9.2	4.2	2.9	きわめて鉄分が多い
2	1地区南Ⅷ層	76	5.4	4.5	1.9	
3	1地区表採	228	6.8	4.7	2.8	きわめて鉄分が多い
4	1地区南Ⅷ層	104	5.7	5.0	2.7	比較的鉄分が多い
5	1地区北Ⅷ層	52	5.8	3.4	2.4	
6	1地区北Ⅷ層	44	5.2	3.5	1.5	
7	1地区北Ⅷ層	36	5.0	3.4	1.7	切断面を有する
8	2地区Ⅳ層	12	2.3	2.0	1.1	



第23図　平安時代後期土器編年図

第2節　近　　世

本址は前述のように、『甲斐国志』巻之十八　村里部第十六　大明見村の条に「本村ヨリ三町許リ鳥打坂、麓ニ古屋ト云地アリ貞享三年民戸皆今ノ地ニ移住ス」と記され、本遺跡と古屋敷A遺跡を含めた地域には、貞享以前の大明見村の民家が存在し、遺跡東限には大明見浅間神社の旧社（古宮）が祀られ、かつての大明見村の中心地であったことが推定される。また、享和4年（1804）の地方文書によれば、当地には「宮ノ脇」「井戸端」「くね尻」「堂の前（阿弥陀堂）」等の地名が存在したことが知られる。本遺跡のあたりは宮ノ脇と呼ばれたところであろう。ことに3地区の民家を建設するための削平面及びその堆積土層中からは生活什器、鉄製品の出土をみ、柱穴等の遺構の一部が検出された。遺物の出土状況は当時の生活面を反映していると考えられる。

出土遺物は陶器と磁器からなり、（第21図1・2）は生産地不明の陶器・磁器皿、（5）は内耳鍋の胴部破片、（3・6～9）は瀬戸系の製品であろう。（4）は飴釉を塗した蓋であり、（6）の湯呑茶椀とともにさらに年代の降る時期の遺物かもしれない。金属製品については、ほうろく鍋（第22図2）、火格子（ロストル）（7）、キセルなどの生活道具が出土している。

第Ⅴ章　古屋敷A遺跡発掘調査

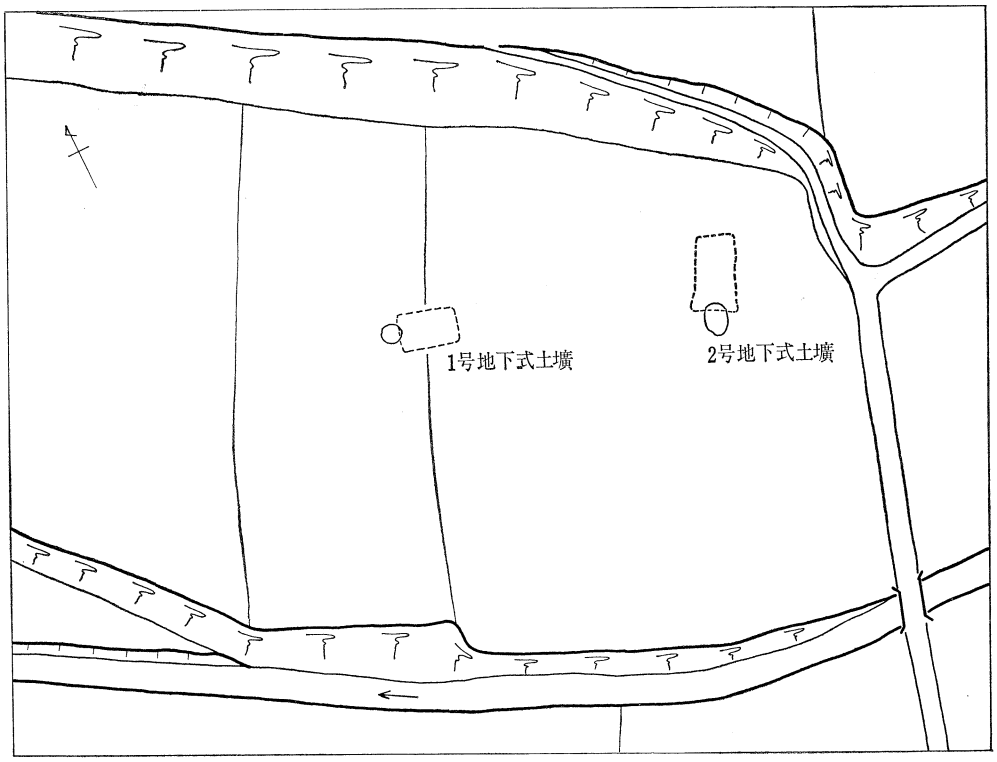
第1節　遺跡概観

古屋敷A遺跡は、富士吉田市大明見字古屋敷（柏木氏所有地）に所在する。道志山地の一峯杓子山より北西にのびる尾根、通称背戸山南麓の緩斜面に立地し、前面を東西に流れる古屋川の左岸にあたる。標高は約760mである。周辺には、古屋敷B、山の神戸、長日向などの遺跡や、親鸞聖人名号塔、庚申塔、石仏などの石造物も存在し、歴史的に恵まれた環境にある。

本遺跡内の畑地においても、縄文時代早期～中世に至るまでの長期にわたる土器片、石器等を表面採集することができる。

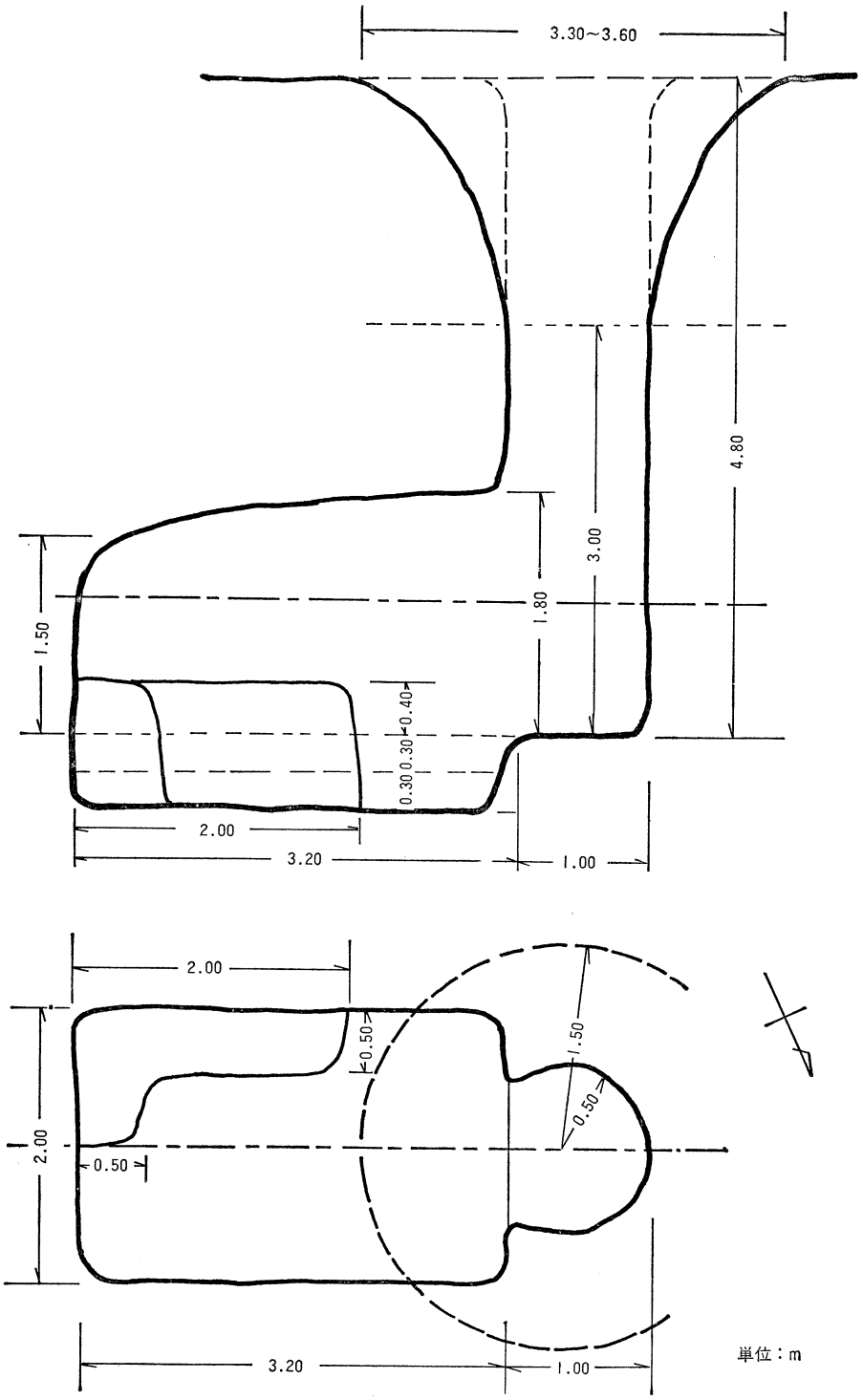
また、本遺跡内には、現在西桂町に所在する福善寺がもともと所在していたということが言い伝えられており、『甲斐国志』には、「土人相伝フ古福善ト稱ス此寺小沼村ヘ遷リシ後元禄二年上吉田ヨリ慈光院ト云小刹ヲ移シ来リテ其跡ニ建立シ月光寺ノ末トスト云」（巻之八十九、仏寺部第十七上）と記されていることから、言い伝えが事実であるとすれば、元禄二年(1689)以前には、この地に福善寺が所在していたことになる。

さらに、甲州都留郡下吉田村月光寺由緒書（抜萃）の記事によれば、「一、九拾七年以前慶長十五庚戌年開基開山禅心三拾六年以前寛文十一辛亥上吉田村ゟ当村江引移申候」とあり、慈光院が寛文11年（1671）に上吉田より、大明見に移転したことになっている。このことから、



第24図　古屋敷A遺跡遺構分布図

福善寺がこの地に所在していた時期はさらに古くなり、寛文11年（1671）以前であるという可能性を持つことが理解される。



第25図　第１号地下式土壙

この地域の本格的な調査はこれまで行われたことはなかったが、昭和のはじめには、地元の中学生によって地下式土壙（第1号地下式土壙）発見の報告がなされており、昭和30年頃には、この地下式土壙の実測調査が未報告ながら行われている。

今回調査を行った地下式土壙は、これまで確認されていたものと隣接しており、地下式土壙としては、本遺跡内で二基めにあたるものである。

第2節　調査経過

昭和56年10月27日、柏木敬正氏所有の畑地内の一部に穴があいたとの連絡を受け、この畑地が古屋敷A遺跡内にあることから現地踏査を行ったところ、地下式土壙であることを確認することができた。そこで富士吉田市教育委員会では、文化財保護・市史編纂事業の一環として調査を実施することを決定し、昭和56年11月18日～24日までの期間で、埋土の発掘作業、測量、実測調査を行ったものである。

第3節　遺構と遺物

本遺跡内においては、前述の如く地下式土壙の発見は二基めにあたり、便宜上、今回調査以前に確認されていたものについては1号地下式土壙、今回調査を行ったものについては2号地下式土壙と呼称する。

1号地下式土壙については、昭和30年頃実測調査が行われているものの、今回の調査では確認することができなかった。このため当時の実測図による簡単な報告にとどめたい。

1号地下式土壙（第25図）

実測図によると、主軸をほぼ東西に持ち、竪坑の入口部は直径約170cmの円形、坑床までの深さは確認面より480cmである。地下室下底面と坑床とは60cmの段差を持っている。

地下室内は、下底面で長さ320cm、幅200cmの隅丸長方形の平面形態を持ち、高さは210cmを計る。地下室の施設として、奥壁から南側壁にかけて幅50cm、高さ100cmでベッド状の遺構が存在していた。

埋土は、60cm程度地下室内にほぼ水平に堆積していた様子であり、下底面から30cmは軟土、その上面に30cmの泥土が堆積していたことが図示されている。

工具痕の有無、天井の形態などについては不明である。

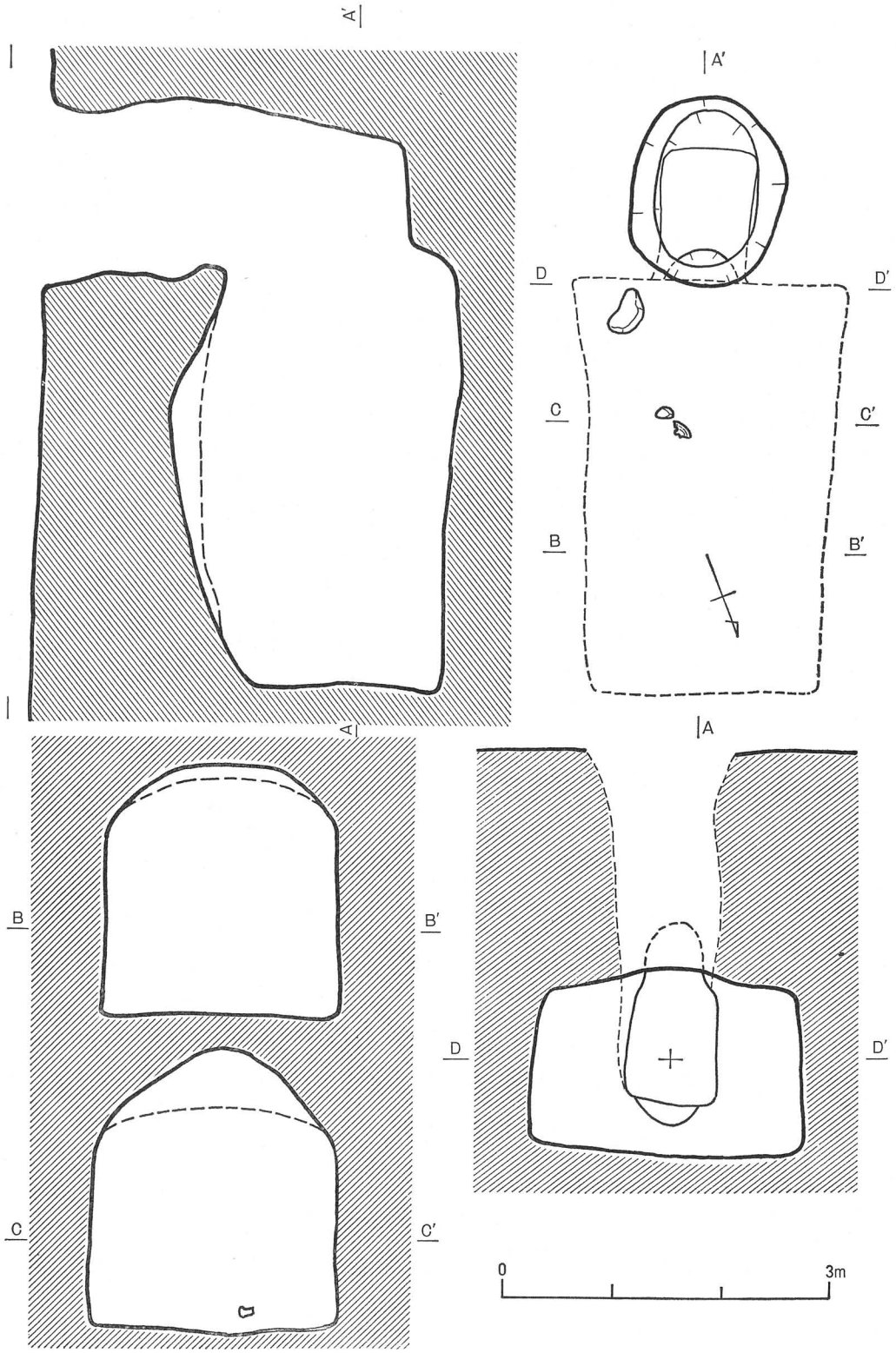
また、遺物についても中世陶器類の出土がみられたとされるが詳細は不明である。

2号地下式土壙（第26図）

2号地下式土壙は、1号地下式土壙より約17m東に位置し、主軸はほぼ南北にある。

竪坑の入口部は直径約180×230cmの楕円形、坑床は160×100cmの長方形を呈し、地下室下底面より約40cmの段差が認められた。

地下室内は、ほぼ長方形に近い平面形態を持つが、奥壁に近づくにつれて若干幅が狭くなっている特徴を持つ。下底面での長さは、約490cm、幅約260～320cmである。地下室の高さは約250cmを計り、人が十分に立つことができる状態となっている。



第26図　第２号地下式土壙

天井の断面は、いわゆるカマボコ状を呈するが、中央部付近ではローム層中に挟まれるスコリアベルト（火山灰層）を掘り込んでいるためにスコリア層の崩落が認められた。

埋土は、竪坑より地下室下半部に堆積しており、粘性の強い黒褐色土であった。地下室入口部付近では、人頭大の自然石が自然に流れ込むような状態で出土している。また、地下室南西コーナー部付近では、下底面より10cm程度上面に炭化物を含み、粘性、しまりを全く持たない灰の層がわずかながら検出された。

2号地下式土壙からは、ベッド状遺構、溝などの特殊な施設、及び工具痕も全くみられなかった。

第4節　遺　　物

2号地下式土壙の地下室内に埋没していた土砂の中からは、縄文土器片、弥生土器片、石臼、古銭等の遺物が検出された。しかしながら、遺構に伴うと考えられるものは地下室下底面に近いレベルから出土している石臼1点、古銭1点のみであり遺物の量はわずかである。

A　縄文土器（第28図）

（1～6・9）は、土器内外面に明確な文様が認められないもの、無文あるいは、器面調整を目的とした擦痕が施されたものである。（9）の平底の底部を除いていずれも胴部片であり、器形の全体をうかがい知ることはできない。（5）を除いていずれも胎土に繊維および雲母片を含むものである。

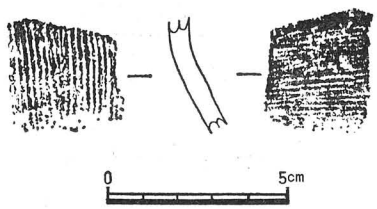
（7・8）は、器面に沈線による施文をもつもので、（7）は胴部に段を持つ土器の屈曲部である。（9）の平底の底部と胎土、色調など酷似し、同一個体であると考えられる。（8）は、表裏に条痕がみられる。

（1～9）は早期後半のいわゆる条痕文土器群に比定することができる。

(10)は、地文に縄文のみを施すものであり、単節縄文RLである。中期前半に比定することができる。

B　弥生土器（第27図）

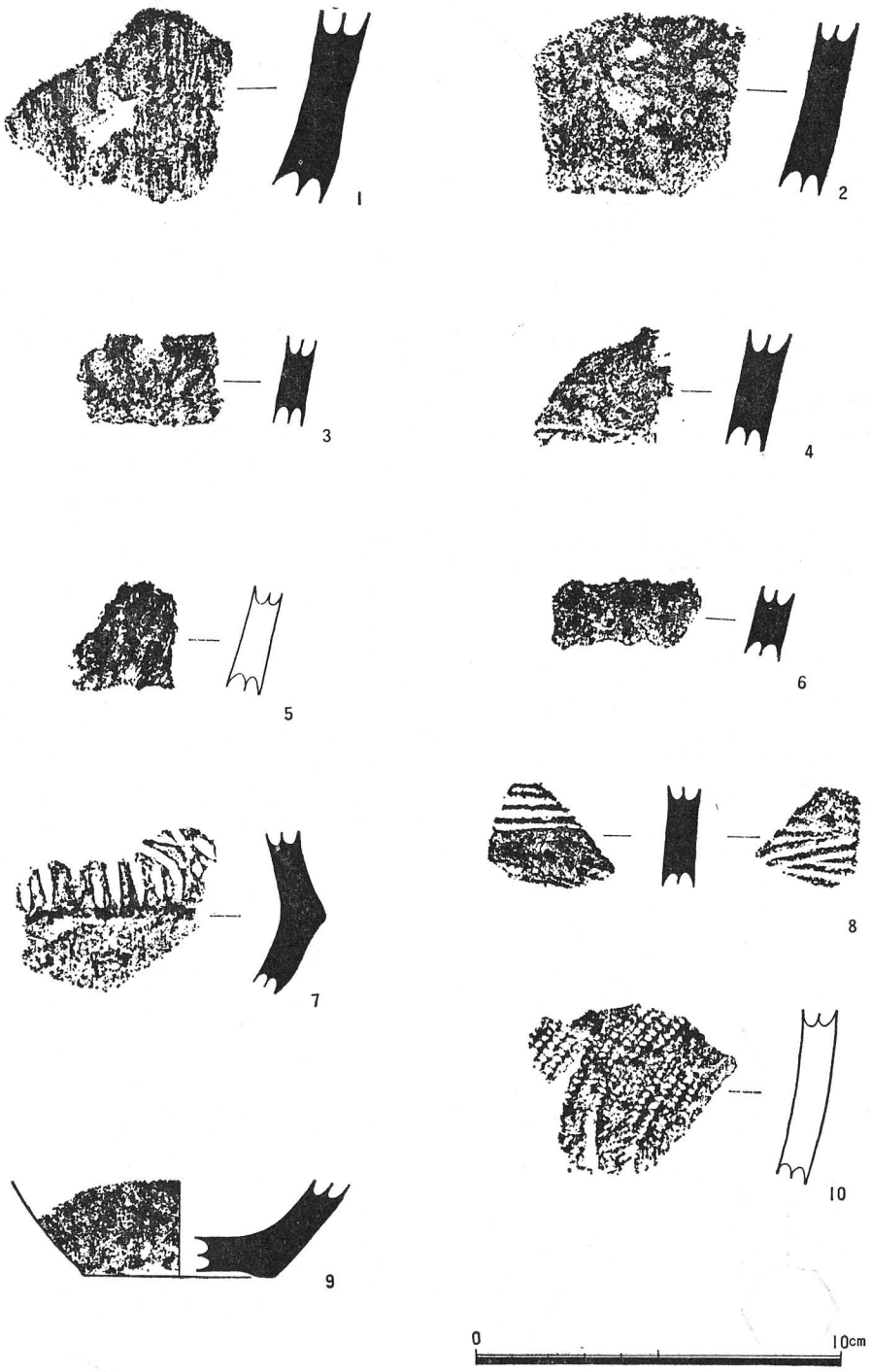
1片の細片にすぎず、全体的な器形、形態をうかがうことはできないが、壺の頸部であると推定される。頸部外面は縦方向に、内面は横方向に、それぞれハケメ状工具により細沈線が施されている。後期後半に比定することができる。



第27図　第2号地下式土壙出土遺物

C　石　　臼（第29図）

地下室内の下底面にほど近いレベルより石臼片の出土がみられた。出土した石臼は上臼で推定による径は約35cmである。厚さは、最も厚い縁部で11cmを計る。縁部は約6cmの幅で厚さ約5cmでめぐっている。縁部外側には、挽き木を固定するための直径約3cmの穴が穿たれて



第28図　第２号地下式土壙出土縄文土器

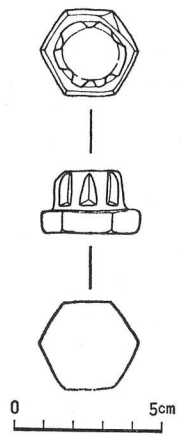
いる。底はかなりえぐり込まれており、三本単位の条である「目」がある程度の規則性を持って描かれている。

D　特殊土製品

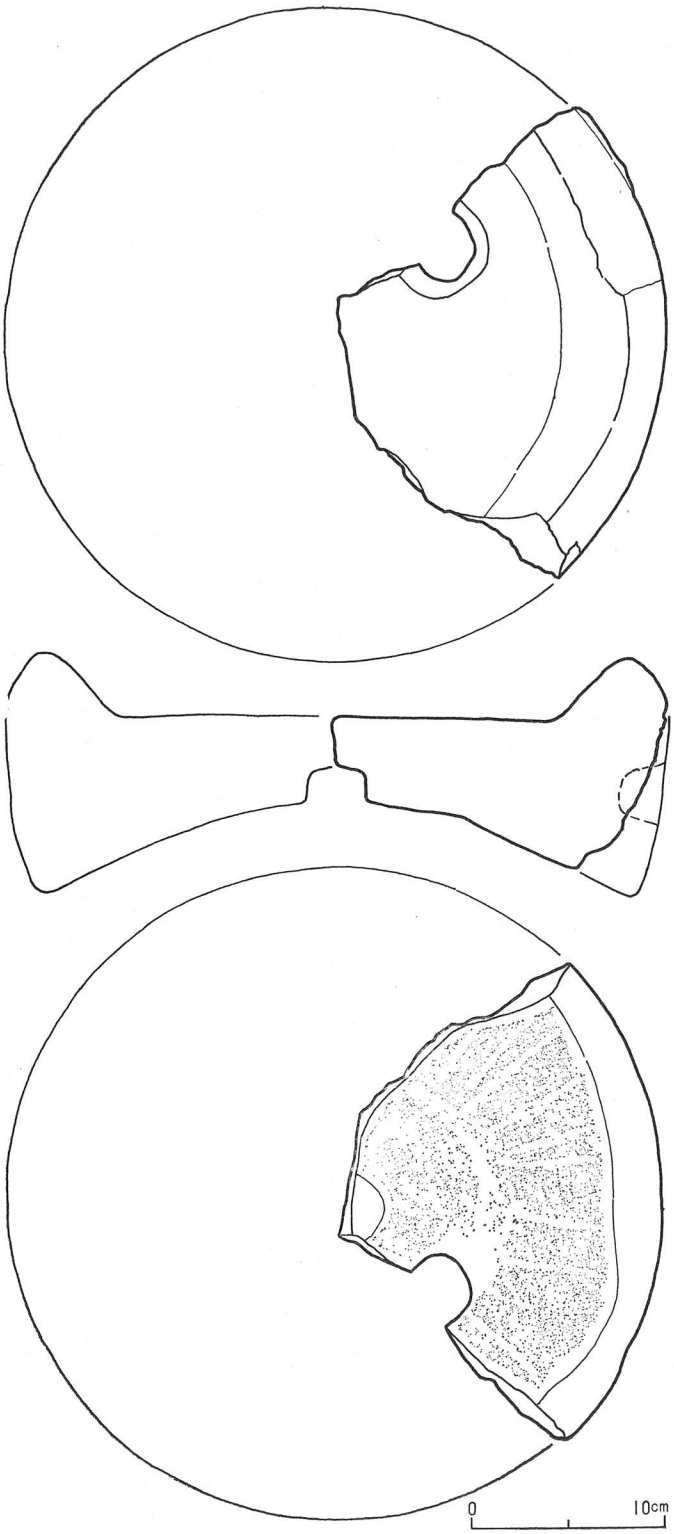
直径約2.5cm、高さ約1.7cmの六角形を呈する土製品である。やや黄色がかった白っぽい、混じりもののない致密な胎土であり、ヘラ状工具によって製作されている。用途は不明である。

E　古　　銭

南宋の「嘉定通宝」であり、初鋳年代1208年とされる。



特殊土製品



第29図　第２号地下式土壙出土石臼

第5節　ま　と　め

地下式土壙は、現在東日本で発見されたものだけでも300例を上回わっているとされている。これほど多数の地下式土壙が発見されながらも、その機能、使用目的に関して明確な解答が与えられていないのが現状である。このため、現在でも貯蔵庫（土倉）説、墳墓（墓壙）説を中心として各種の論議が展開されている。しかしながら、構築年代については、近年いくつかの論文によって、地下式土壙の形態分類、遺物の検討が加えられ、地下式土壙が、「中世から近世にかけて構築されたものであろうと、時期に関しては意見の一致が認められるようになってきた」（半田1979）とされている。

山梨県内においても、大月市原平遺跡、吉久保遺跡、大泉村御所遺跡、上野原町牧野遺跡、武川村上原遺跡などで地下式土壙が正式に報告されている。これらの報告の中で、構築年代については、平安時代末期から江戸時代初期まで、機能については、「墓壙説」(佐藤、数野1978)「地下牢説」（長谷川、1980）などの見解が出されている。

今回報告した、１・２号地下式土壙について構築年代、機能を明らかにすることはできなかった。このことは、これらの遺構が、他地域の一般的傾向と同様に遺物の量がわずかであったことに起因する。

しかし、１・２号地下式土壙ともに、形態的には坑床と地下室下底面の間に段差を持ち、その途中に階段等の施設を持たない、羨道部の簡略化された、半田氏のいうところの有段Ⅰ類に属するものであり、山梨県内では大泉村御所遺跡の地下式土壙に類例が求められる。御所遺跡の地下式土壙からは、雑器、灰釉陶器、ひで鉢、五輪塔、茶臼等の出土がみられ、これらの遺物から構築年代を「大きく室町期から江戸初頭に位置づけられる。」（佐藤、数野1978）としている。また、機能についても、五輪塔、人骨の出土から、「墓壙的性格が強いものと思われる。」としている。

形態の類似だけで、本遺跡からの地下式土壙の年代、機能について言及することはできないが有力な示唆を与えてくれるものであろう。

２号地下式土壙から出土した石臼は厚い「ふくみ」を持ち、「目」の配列もある程度の規則性を持ちながらも、必ずしも整然とはしていないことから比較的古い時代の所産と考えられる。

石臼の出土は、県内では、大月市原平遺跡、大泉村御所遺跡（茶臼）でもみられ、いずれの遺跡も石臼は完形ではなく、人工的にわられたと思われるものもあり、いわゆる「魂ぬき」が行われた破片での出土であることは注目すべきであろう。

なお、古屋敷Ａ遺跡は、遺跡の概要でも述べたとおり、寺院内に存在する可能性が高いことから、寺院と地下式土壙との関係についても考える必要があるのではないだろうか。

未報告ながら、大泉村金生遺跡では50数基の地下式土壙が組織的発掘によって調査されており、その他、一宮町などでも調査が行われたとのことである。今後これらの報告がなされることによって地下式土壙の研究が着実に成果を上げていくことを期待するものである。

おわりに

今回、古屋敷Ａ・同Ｂ遺跡の発掘調査によって、平安時代・中世・近世の遺構を検出することができ、当時の生活の様相を探るうえでの貴重な資料を得た。また、住居址内から出土した遺物は、山梨県東部地域の編年操作のうえに新たな資料を提供し、平安時代後期の甲斐型坏・甕消滅期の遺物が県東部地域でははじめて発見された。

本遺跡をはじめとする明見地区の遺跡群は、古屋敷・明見湖・向原付近のかつて沼沢地であった湿地帯縁辺部と考えられる地にあることは、注目に値する。火山地・原野地帯が大半を占める当地域の中では唯一ともいってよい農耕可能の地帯に本遺跡も立地していることから、平安時代以降本地域の開発が進展し、市域古代史の中でも新たな展開があったことがうかがわれる。

最後に、調査に参加された学生諸君、調査の運営に御尽力下さった大明見連合自治会・大明見財産区・不動湯運営委員会・和泉五郎・宮下高光・加々美利雄・加々美秀雄・宮下博正・加賀美光茂・武藤寿利・柏木敬正・渡辺洋志（順不同）の方々に加えて、宿舎を提供していただき、調査団学生諸君のお世話をいただいた宮下恵美さんの御家族のみなさんに改めて感謝申し上げる次第である。遺物整理にあたっては法政大学考古学研究会の会員諸氏に種々お骨折りを頂いた。ここに厚く御礼申し上げたい。

＜引用・参考文献＞

1964　町田洋「Tephrochronology による富士山とその周辺地域発達史　その２」『地学雑誌』73
1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　大月地内２』山梨県教育委員会
1977　町田洋『火山灰は語る』蒼樹書房
1977　中田英「地下式壙研究の現状について」神奈川考古２
1978　『山梨県大泉村御所遺跡発掘調査報告』山梨大学考古学研究会
1978　三輪茂雄『臼』法政大学出版局
1979　半田堅三「本邦地下式壙の類型学的研究」伊知波良２
1979　『国道都留バイパス建設に伴う詳細分布調査報告書』都留市教育委員会
1980　『堀之内原遺跡発掘調査報告書』都留市教育委員会
1980　『上野原町埋蔵文化財調査報告書』上野原町教育委員会
1981　『富士吉田市の遺跡』富士吉田市教育委員会
1981　『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会
1982　坂本美夫他「甲斐地域の様相」『奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古14
1983　『忍野村の遺跡』忍野村教育委員会

＜文化財審議委員＞

羽田　　光
舟久保兵部右衛門
岩佐　忠雄
渡辺　精二
堀内　友次
勝俣　　誠
野村　泰彦

富士吉田の文化財（その19）
—古屋敷遺跡発掘調査報告書—
1983年3月31日　発行
発　行　富士吉田市教育委員会
編　集　富士吉田市教育委員会
印　刷　株式会社 ぎょうせい
東京都新宿区西五軒町52番地

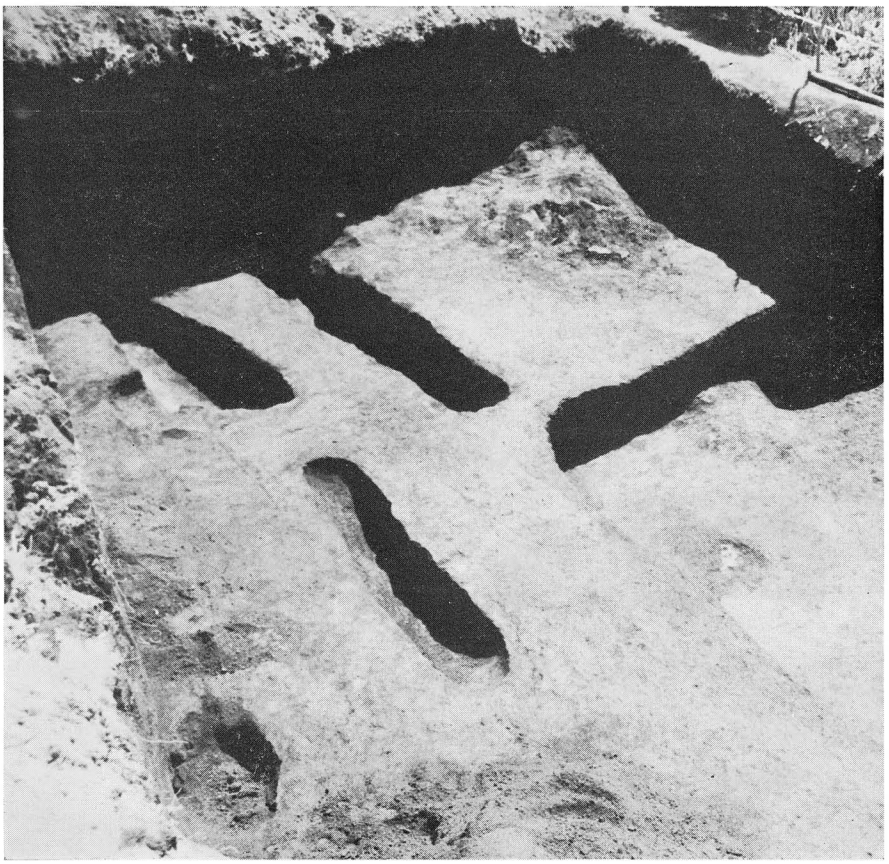
図　　版

図版1　遺跡遠景

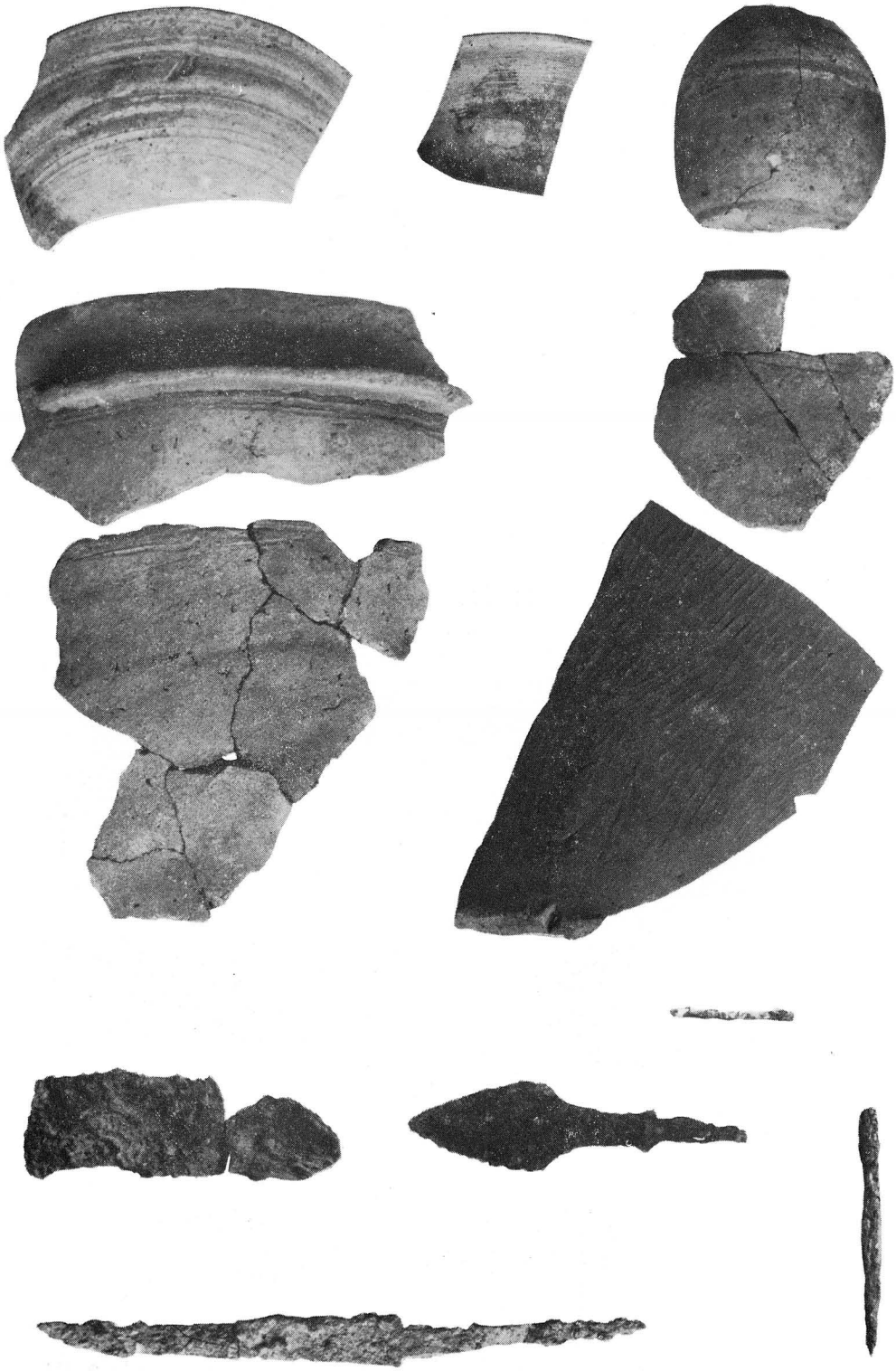
図版2　遺跡近景

図版3　調査風景

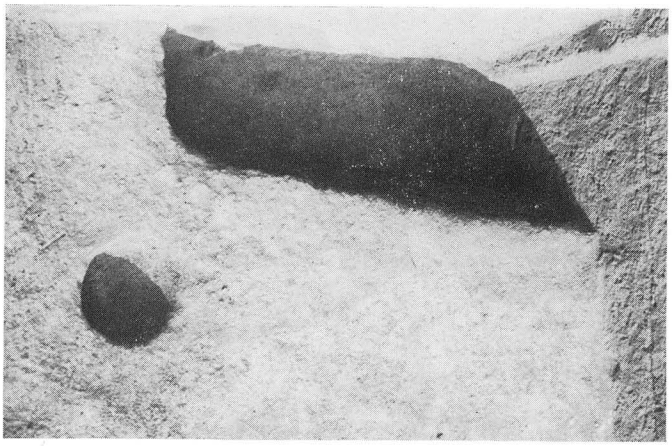
図版4　第1号住居址



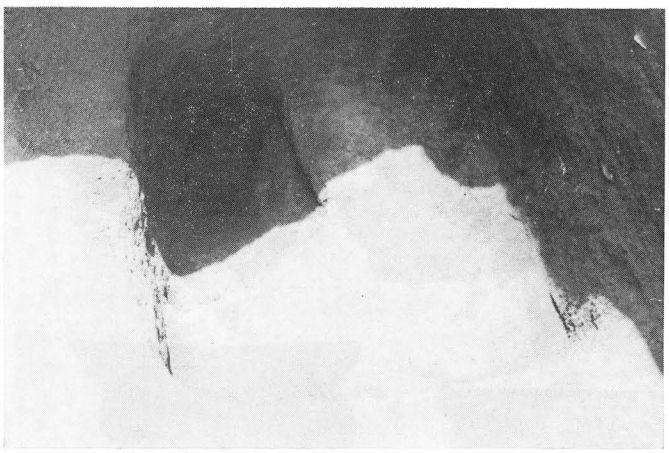
図版5　1地区中世溝状遺構



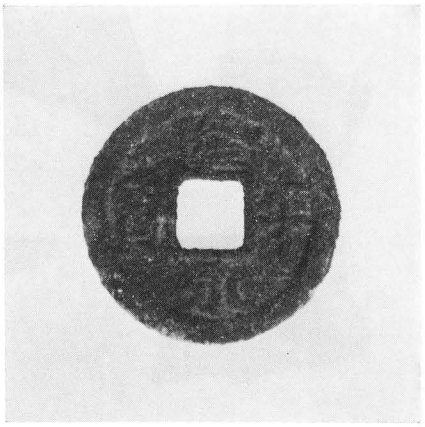
図版６　第１号住居址出土遺物

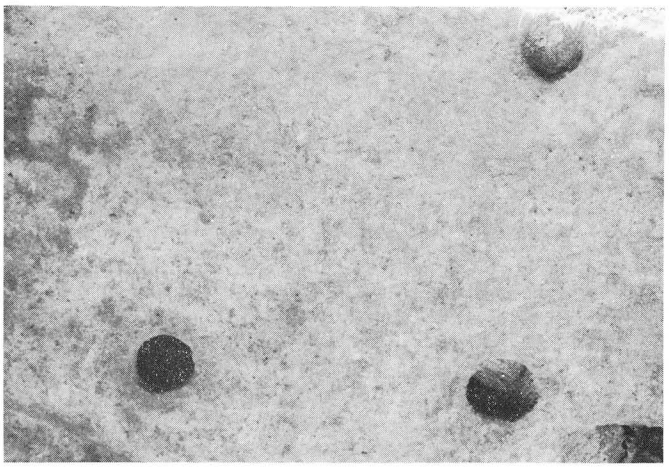


図版７　第２号住居址

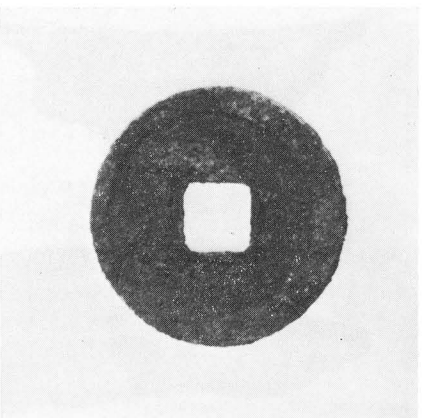


図版８　２地区土壙

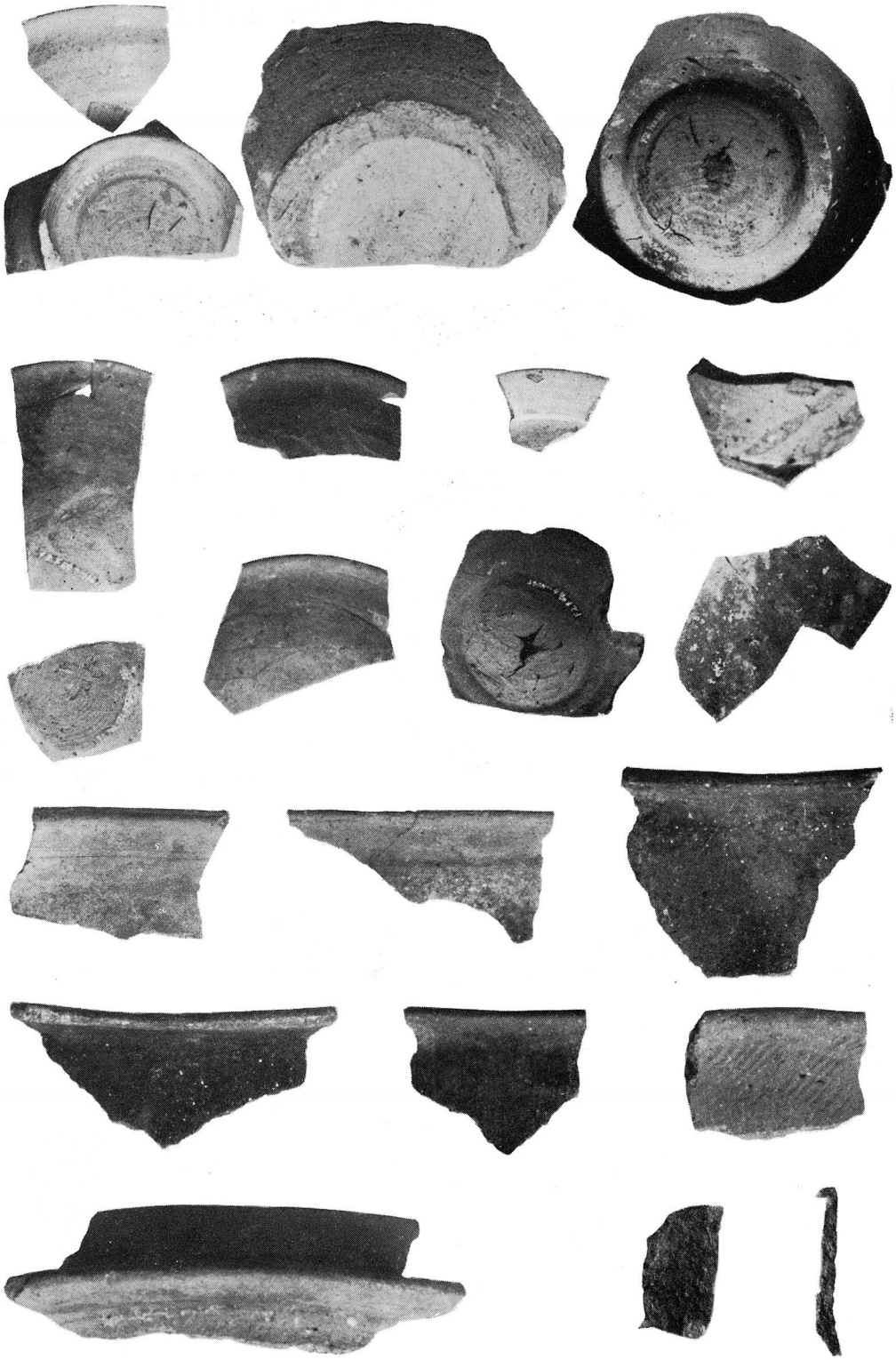




図版９　掘立柱状遺構



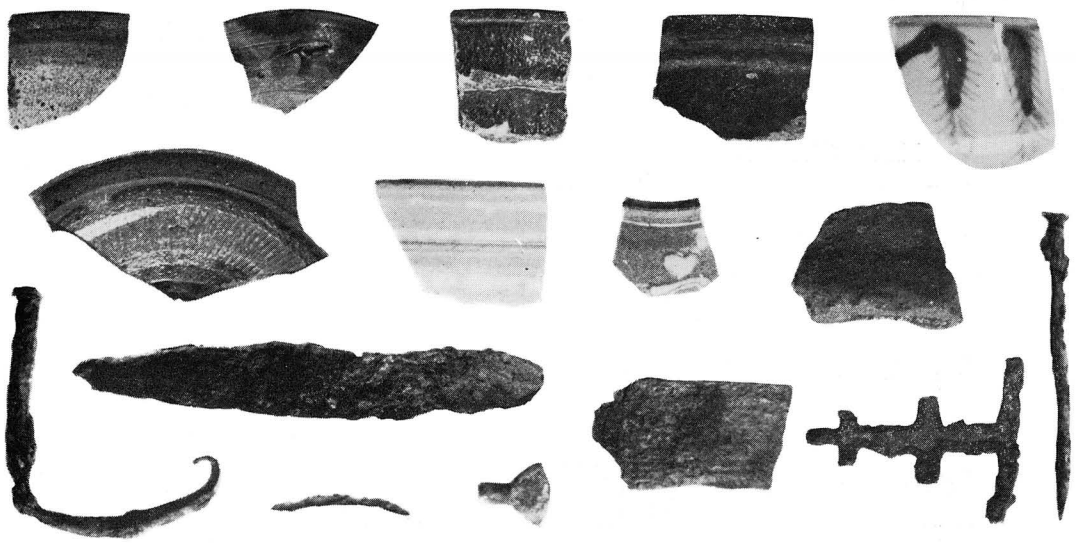
図版10　第２号住居址出土古銭（隆平永宝）

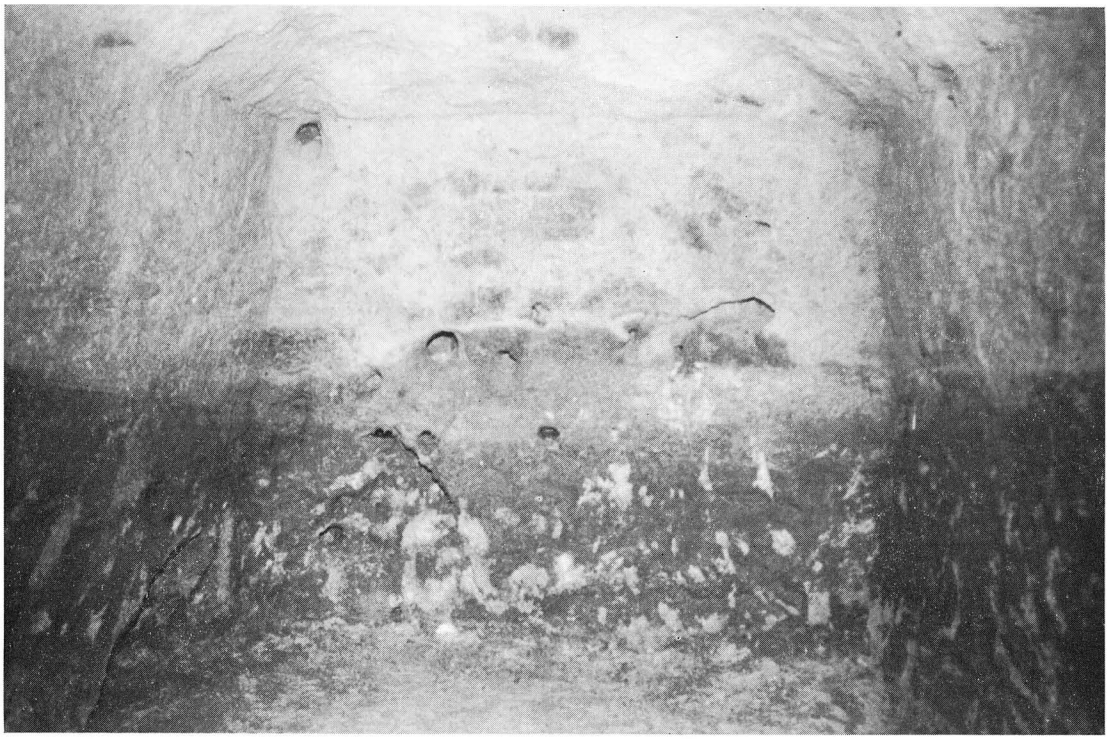


図版11　2地区出土遺物

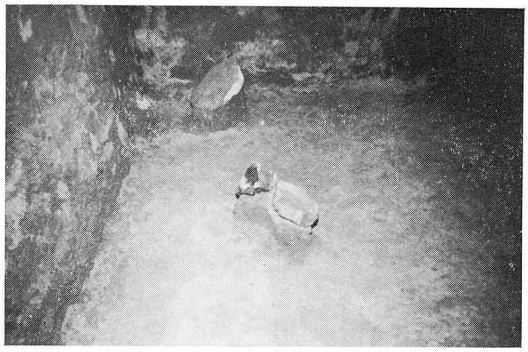
図版12　3地区遺構

図版13　3地区出土遺物

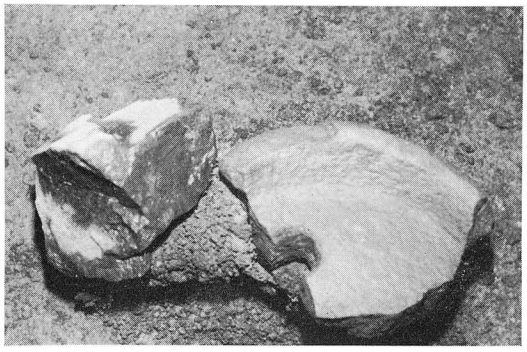




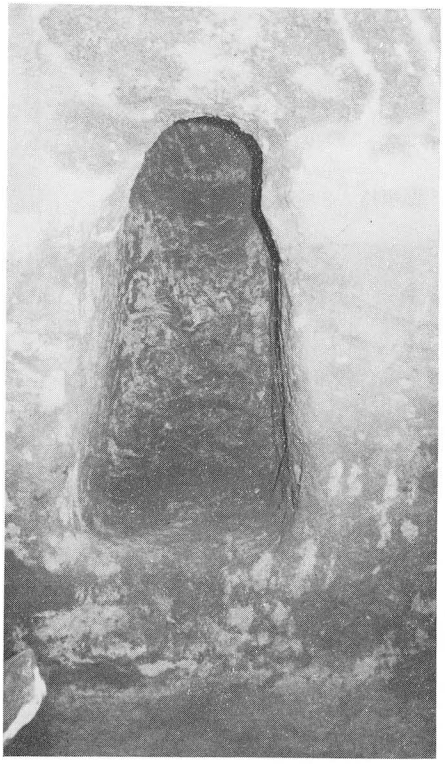
図版14　2号地下式土壙奥壁



図版15　地下室床面



図版16　遺物出土状態



図版17　竪坑部